

# 小深田遺跡 発掘調査報告書

1989

山形県  
山形県教育委員会

こ ふか だ  
小 深 田 遺 跡  
発 挖 調 査 報 告 書

平成元年3月

山 形 県  
山形県教育委員会

巻頭カラー図版



S A 3板材列北辺検出状況（西より）

# 序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和63年度に実施した飽海郡遊佐町小深田遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

遊佐町は、本県の北部にあたり、出羽富士と呼ばれる鳥海山の麓一帯を行政区画として、豊かな農林水産物を生み出しているところです。

発掘調査では、奈良時代の遺物や、平安時代の建物跡をはじめとする集落に係わる多数の遺構と共に、これらを囲むように板材列が検出されたことは、古代出羽国の集落構造に係わる貴重な手がかりを得ることが出来ました。

これらの文化遺産は、私達の祖先が自然環境と歴史の中で創造し、育んできたものであります。これらを理解し、愛護することは、祖先の歴史を知ると同時に、今日の文化を見つめる事にもなるものと思われます。現代に生きる私達は、これらを長く後世に伝え残して行くことが重要な責務であります。

近年、県内各地での開発事業が増加するに伴い、埋蔵文化財とのかかわりも増加の傾向にあります。この両者の間には、困難な問題も山積みの状況であります。が、生活文化を向上とする同じ立場から諸問題を調整し、今後とも埋蔵文化財保護のため努力を続けてまいる所存であります。

最後になりましたが、調査にあたって多くの御協力をいただきました地元の方々をはじめ、遊佐町、遊佐町教育委員会、庄内教育事務所、庄内支庁経済部月光川土地改良事務所、月光川土地改良区他関係各位に対し、心から感謝申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財の理解を深めその保護普及の一助となれば幸いと存じます。

平成元年3月

山形県教育委員会  
教育長 木場 清耕

## 例　　言

- 1 本書は山形県教育委員会が山形県農林水産部の委託を受けて、昭和63年度に実施した県営ほ場整備事業（月光川左岸地区）に係る小深田遺跡（山形県遺跡地図2076）の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、昭和63年5月11日から同年9月8日までの延109日間実施した。
- 3 遺跡の所在地は、山形県飽海郡遊佐町大字遊佐町字小深田他
- 4 発掘調査体制は下記のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会  
調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団  
調査担当者 主任調査員 佐々木洋治  
同(現場主任) 野尻 侃  
調査員 須賀井新人 池田 茂  
事務局 事務局長 後藤 茂彌  
事務局長補佐 土門 紹穂  
事務局員 佐藤 大治 長谷部恵子 長谷川 浩  
高橋 春雄

- 5 本報告書の作成は野尻 侃、須賀井新人が担当・執筆し、挿図・図版・表の作成補助には、松浦美幸、遠藤淑子、三浦節子、鈴木良子、塩野美穂、滝井江里、前田和子、海和由美子、桜井浩子、尾形律子があたった。本書の編集には阿部明彦、野尻 侃が担当し、全体については佐々木洋治が統括した。
- 6 本書の作成にあたって国立歴史民俗博物館の平川 南助教授には墨書き器等の文字資料解説など御指導と助言を賜わった。また佐藤徳宏氏（酒田市立中央高教諭）には遺跡全般にわたって御指導、助言を賜わった。本遺跡出土の灰釉陶器(第30図209)の宝相花文皿については、愛知県日進町教育委員会伊藤孝明氏に多大な御教示を得た。末尾ながら記して感謝申し上げる。
- 7 出土遺物については、山形県教育委員会が一括保管している。

# 目 次

卷頭カラー図版 S A 3 板材列北辺検出状況（西より）

## 序

## 例 言

## 凡 例

### I 遺跡の立地と環境

1 地理的環境.....	1
2 歴史的環境.....	1
3 周辺の遺跡.....	3
4 立地と層序.....	4

### II 調査の経緯

1 調査に至る経過.....	5
2 調査の経過.....	5

### III 検出遺構

1 遺構の分布.....	13
2 掘立柱建物跡.....	13
3 板材列.....	16
4 土壙 .....	19
5 溝状遺構.....	25
6 旧河川跡.....	26

### IV 出土遺物

1 遺物の分布.....	27
2 遺構内出土遺物.....	28
3 包含層出土遺物.....	47

### V まとめ

1 遺構について.....	50
2 出土遺物について.....	51

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 遺跡の層序	4
第3図 遺跡全体図	7
第4図 遺構配置図（A地区）	9
第5図 遺構配置図（B地区）	11
第6図 S B 1 建物跡	14
第7図 S B 2 建物跡	15
第8図 S A 3 板材列	17
第9図 S K156 土壙	19
第10図 S K23・27・32・33・40・41・63・142・147・149 土壙	21
第11図 S K203 土壙	22
第12図 S K242・243・244 土壙	23
第13図 S K266・268・276・491・498・509 土壙	24
第14図 S D262・265 溝状遺構	25
第15図 旧河川跡土層断面	26
第16図 柱穴跡・板材列出土遺物	28
第17図 S A 3 板材列しきり板(1)	29
第18図 S A 3 板材列しきり板(2)	30
第19図 土壙内出土土器（1）	31
第20図 土壙内出土土器（2）	32
第21図 土壙内出土土器（3）	33
第22図 土壙内出土土器（4）	35
第23図 土壙内出土遺物	36
第24図 溝状遺構出土土器（1）	38
第25図 溝状遺構出土土器（2）	39
第26図 溝状遺構出土土器（3）	40
第27図 溝状遺構出土土器（4）	42
第28図 溝状遺構出土遺物	43
第29図 包含層出土土器（1）	45
第30図 包含層出土土器（2）	46
第31図 包含層出土遺物	48

## 図版目次

- 図版1 遺跡遠景（南西から） 遺跡近景（東から）  
図版2 トレンチ調査風景 A地区設定  
図版3 A地区表土除去 B地区表土除去  
図版4 層序（B地区西壁） A地区遺構検出状況（北から）  
図版5 東側排水路調査区全景（西から） 西側排水路調査区全景（東から）  
図版6 B区遺構検出状況（東から）  
図版7 S B 1 建物跡 S B 2 建物跡  
図版8 S A 3 板材列北辺（東から） S A 3 板材列北辺（西から）  
図版9 S A 3 板材列 西辺南北列・北辺東西列・北辺中央部分・北西角・西辺列土層断面・しきり板部土層断面  
図版10 S K156土壌完掘 S K498土壌土層断面  
図版11 S K149土壌完掘 S K203土壌完掘 S K33土壌完掘 S K244土壌完掘  
図版12 S D91溝状遺構 S D65溝状遺構  
図版13 S D262溝状遺構遺物出土状況 S D152溝状遺構完掘 S D265溝状遺構検出状況  
図版14 S K156遺物出土状況 土器出土状況 土師器一括土器・S D91出土土器出土状況・R P34赤焼土器甕・R P43赤焼土器甕  
図版15 土器出土状況 R P32赤焼土器甕・R P35・36・37赤焼土器坏・R P39須恵器・大甕・R P51須恵器蓋・R P52須恵器高台付坏・R P55須恵器坏・S D262内須恵器・大甕・S D265土器出土状況  
図版16 柱穴跡・板材列出土土器・しきり板  
図版17 板材列しきり板、土壌出土土器  
図版18 土壌出土土器  
図版19 土壌・溝状遺構出土遺物  
図版20 溝状遺構出土土器(1)  
図版21 溝状遺構出土土器(2)  
図版22 溝状遺構・包含層出土遺物  
図版23 包含層出土遺物(1)  
図版24 包含層出土遺物(2)

## 付表目次

表1	周辺の遺跡	2
表2	調査工程表	6
表3	出土遺物点数表	27
表4	柱穴跡・板材列遺物観察表	30
表5	土壌内出土遺物観察表(1)	34
表6	土壌内出土遺物観察表(2)	37
表7	溝状遺構出土遺物観察表(1)	41
表8	溝状遺構出土遺物観察表(2)	44
表9	包含層出土遺物観察表(1)	47
表10	包含層出土遺物観察表(2)	49

## 凡　例

- 1 本書で使用した遺構の分類記号は下記の通りである。

S B……建物跡	S A……板材列	S K……土塙	S D……溝状遺構
S G……旧河川	E B……柱穴	E P……小穴	S X……性格不明遺構
- 2 遺構番号は基本的に現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲している。
- 3 遺物に付した記号は、R P(土器・土製品)、R Q(石製品)、RW(木製品)、RM(金属製品)であり、遺構内での検出順にしたがって番号を付した。
- 4 報告書作成・執筆の基準は下記のとおりである。
  - (1) 遺構分布図、同平面図中の方位は磁北を示している。なお、グリッドの南北軸は、磁北より18° 00' 東に傾いている。また建物跡の主軸方向は、南北棟を桁行で、東西棟を梁行で測定した。
  - (2) 遺構実測図では1/40~1/160他の縮図で探録し、各々にスケールを付した。
  - (3) 遺物実測図・拓影図・図版は原則的に1/4で探録したが、大型の土器や、板材については1/6とし、各々にスケールを付した。
  - (4) 土器実測図・拓影図の断面では、白ヌキが土師器、●印が赤焼土器、黒ベタが須恵器を表している。また土師器で内黒のものは内面に網点を入れ、両黒のものでは内面右端と外端に網点を入れた。
  - (5) 遺物観察表中の計測値欄で、( )内数値は図上復元による推計値ないし残存値を示している。出土地点欄の層位では、「F」は遺構覆土内出土、「Y」は遺構底面出土を各示し、ローマ数字「I~IV」等は、遺跡を覆う土層(基本層序)を表わしている。
  - (6) 遺物写真是、原則的に小形の壺類が1/4、破片資料1/4・1/6、大形の遺物については1/6、土鍤等は1/2としたが、挿図毎にスケールを付した。
  - (7) 遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版ともに共通したものとした。

# I 遺跡の立地と環境

## 1 地理的環境

出羽丘陵の西に開ける海岸平野である庄内平野は長さ50km、南北に長い三角形の低平地で、北端では幅が狭まって島海火山の噴出物の下に没する。東縁は断層線に沿うほぼ直線状の山麓線となっており、海岸には加茂台地から島海山麓に至る大きな砂丘が発達している。庄内平野の北部を占める飽海地区は、日向川・月光川・高瀬川等の河川が出羽丘陵から西に向かって流れ、平野部の出口には小扇状地を形成している。しかし、平野の主要部分は庄内三角洲地帯であり、海拔高度5～15mのきわめて低平な平野となっている。

庄内平野は地形が西方に開き、東方も最上盆地や奥羽山脈中の峠を経て太平洋側と通じていて、風が強く、日本有数の強風地域になっている。庄内地方の風の強さと頻度とは海岸の巨大な砂丘がこれを物語っており、飛砂とその防御とはこの地方に数々の歴史を残してきた。庄内地方では集落も一種の気候景観で、屋敷森の発達は季節風に対する防風のためのものである。特に北西または西風が多いが、オホーツク海から高気圧が張り出して東北地方全域に東風が卓越するときは、最上川の狭谷が風洞効果を發揮して最上盆地から強風が吹き出す通路となり、庄内平野の出口には局地強風域をつくるようである。これらの風はダシと呼ばれ、地域により「清川ダシ」、「立谷川ダシ」などの呼び名がある。

## 2 歴史的環境

庄内平野には古墳時代から奈良時代にかけての遺跡が八幡町市条の八幡宮東方山上や最上川に沿った平田町飛鳥・砂越等に分布している。山形県の古墳文化は内陸地方を中心にして発達し、内陸南部米沢市の戸塚山古墳群、南陽市稻荷森古墳等、5世紀代の古墳が存在している。または山形平野部にも同時期の埴輪を伴う土矢倉古墳、菅沢二号墳が存在する。庄内地方では鶴岡市大山の菱津古墳が存在するが、菱津古墳以後の古墳が確認されていない。

飽海郡遊佐町には現在まで167ヵ所の遺跡が確認されており、時代も旧石器から中世・江戸までの長期に及ぶ。遺跡分布の特徴は出羽丘陵山麓部に館跡や窯跡が、平野部や川筋に平安から鎌倉時代に至る遺跡が点在している。昭和58年～同61年の間、計4次にわたって調査された吹浦遺跡は、縄文時代の竪穴住居跡やフラスコ状土壙、平安時代の住居跡などが発見され、庄内における縄文・平安期遺跡の性格と背景にある文化・地域圈を考える上で、画期となった遺跡として特筆される。平野部においては、日光川・月光川等の豊かな自然流水を利用して中世以来水田が開かれていたらしく、両止堰と称する成立の古い水路ができている。これらからは古代出羽国にかかる飽海地方の重要性が理解できる。



第1図 遺跡位置図 (S = 1 : 50,000)

表1 周辺の遺跡

遺跡名	種別	時代	遺跡名	種別	時代
1 小深田遺跡	墓 墓 跡	平安	12 道中A・B遺跡	墓 墓 跡	平安・平成
2 下条遺跡	ク	ク	13 石田遺跡	ク	平安
3 洋橋遺跡	ク	平安末～鎌倉	14 宇都遺跡	ク	平安・平安末～鎌倉
4 大橋遺跡	地 穴 遺 蹟	墓 墓 跡	15 大坪遺跡	ク	平安
5 木戸遺跡	墓 墓 跡	平安末～鎌倉	16 三田遺跡	ク	平安末～鎌倉
6 前田遺跡	ク	平安	17 鶴嶺遺跡	ク	ク
7 地蔵園遺跡	ク	ク	18 仁田田遺跡	ク	平安末～鎌倉
8 鹿田遺跡	ク	ク	19 宮子櫻下遺跡	ク	平安末～鎌倉
9 佐藤遺跡	ク	ク	20 天狗山B遺跡	墓 墓 跡	平安
10 畠田遺跡	ク	平安末～鎌倉	21 家村A遺跡	墓 墓 跡	平安
11 宮の下遺跡	ク	平安・平成	22 鶴嶺遺跡	墓 墓 跡	平安以降

### 3 周辺の遺跡（第1図・表1）

小深田遺跡が位置する飽海地区の平野部には、西流する高瀬川・月光川・日向川に沿う平安から中世鎌倉期の遺跡が数多く分布する。しかし実際に発掘調査を行った遺跡数は少なく、その多くは範囲の確認にとどまっている。

日向川と月光川のほぼ中間地点、下小松地区内に位置する前田・地正面・佐渡・塙田の4遺跡は、昭和52年～同54年の間計5次に亘って調査され、特に地正面遺跡では掘立柱建物跡・井戸跡・土壙等の遺構と、それらに伴う一括遺物が検出された。時期的には9世紀前半まで遡り得る一群とそれに後続する一群と考えられ、同時期の藤島町平形遺跡の調査知見・成果などと合わせて、検出された建物跡群が庄内における平安時代集落跡を構成する一単位として集落研究の好資料となった遺跡である。

昭和57年に高瀬川河川改修事業により発掘調査を実施した宅田遺跡は、平安時代前半から中葉にかけての建物跡をはじめ多数の土器が出土した。そして高瀬川の流域に沿う10数ヶ所の平安時代の遺跡と共に、出羽国衙に擬定される「城輪柵跡」に関する方格地割を当てはめるならば、その南北軸線上60数町ないし70町の距離にあり、北の周縁部に当たる集落跡群として注目された。

昨年度・今年度と2次の調査が行なわれた大橋遺跡からは、石組みを伴う礎石建物跡とこれを丁形にとり囲む一辺48.4mに立ち並ぶ柵木列、掘立柱建物跡やこれに付随する井戸跡の検出、さらに日本海交易によってもたらされたと思われる珠洲焼系陶器や美濃瀬戸系陶磁器、中国産青磁、多種類の木製品や漆器、古錢などの遺物が出土した。以上の見地から12～14世紀の中世鎌倉時代に営まれた地方豪族、川北冠者忠衡の居館と、それをとり巻く集落跡であると推定され、県内では他に例のない特異な遺跡として挙げられる。

同じく昨年度と今年度に計4次に亘り発掘調査された下長橋遺跡は、その第2次調査において県内では初めて、全国的にも珍しいと思われる特殊な埋設遺構が発見された。遺構1基毎に完形な赤焼土器甕1個、小形皿10枚、壺、小砾が埋設される。これらは地鎮あるいは他の祭りに関係すると考えられ注目を集めた。また東隣りの浮橋遺跡や、小深田遺跡でも確認され、庄内地方の平野部では初めて遺構内覆土に伴う火山灰が見つかり、地方的規模の噴火による降灰との鑑定が得られた。

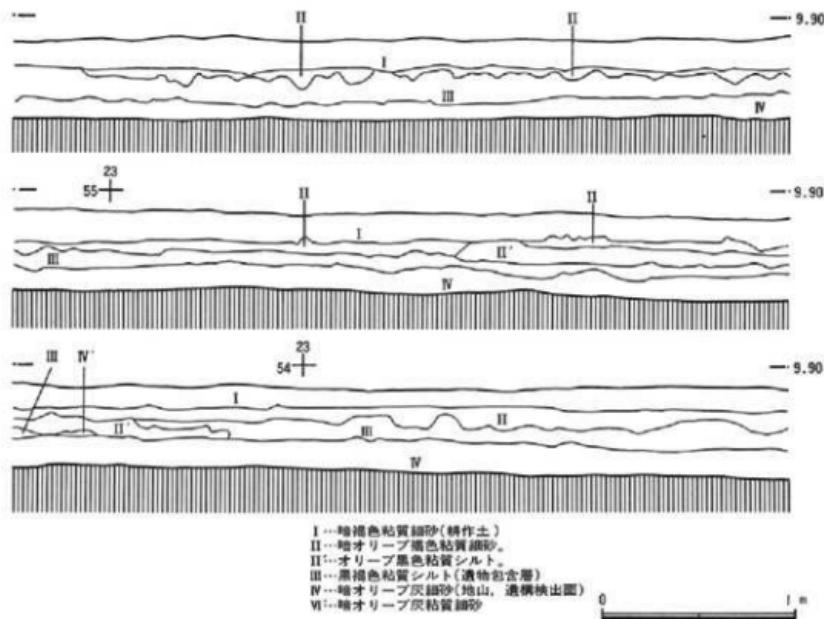
平安時代の掘立柱建物跡、柵目板を井桁状に組んだものや丸木舟を転用した井戸跡の検出、赤焼土器・小形皿32枚が組み重なって一括出土した浮橋遺跡は、集落跡としての開始時期を下長橋遺跡とほぼ同じ頃に捉えられる。

窯跡では、奈良末～平安初の劍竜社窯跡群、および蕨岡の鞍部に群集する9世紀中葉代の天狗森・唐戸岩窯跡群が注目される。

#### 4 立地と層序（第2図）

小深田遺跡はJR東日本羽越本線遊佐駅西側一帯に、東西800m、南北600mの範囲で確認され、遊佐町大字遊佐町字小深田を中心とした水田に位置する。遺跡の北側を西流する月光川は、鳥海山より発する水源を集め蛇行しながら日本海へと注ぎ、本遺跡は月光川左岸に広がる河間低地に立地し、標高は約10mを測る。遺跡の範囲内は現在のように平坦な地ではなく、後背湿地や自然堤防状の微高地が発達し起伏があったと考えられる。

本遺跡を覆う表層の土質は、シルト・細砂よりなる沖積土壌であり、やや安定した状況と確認される。しかし、調査の所見では北西方向にかけて除々に基盤層が下がり、擾乱やグライ化による土層の動きが窺え、やがて泥炭層へと推移する。これはすぐ北側に月光川が西流し、その自然堤防（現況町道）沿いに広がる後背湿地であったことが理解される。基本的層序はB地区23-53~55、グリッド南北線の西壁より観察し、遺物包含層、遺構の確認面等から4大別が可能であった。15~20cmの厚さでほぼ均一に堆積する現耕作土下に、深耕による擾乱か旧耕土と思われるII層があり、さらに遺物を多く含みあまり擾乱を受けていないII'・III層が続く。IV層はIII層下30cm前後の厚さをもち、部分的に多量の遺物を含んでいる。本層直上面またはIII層下部が遺構検出面にあたり、比較的安定した堆積状況を示す。IV層上に薄く不均質であるが、粘性を有し、流れ込みによると思われるIV'がのる。



第2図 遺跡の層序

## II 調査の経緯

### 1 調査に至る経過

庄内平野の北部、出羽富士と呼称される鳥海山の麓、遊佐町は自然環境に恵まれた地域として知られている。遊佐町周辺の水田地帯や、鳥海山から延びる台地上には県指定遺跡の「吹浦遺跡」をはじめ、繩文時代から鎌倉時代にかけての遺跡が数多く分布する。本遺跡も古くから須恵器や赤焼土器等の土器片が出土することで知られており、昭和38年刊行の「山形県遺跡地名表」(註1)にも平安時代の集落跡として記載されている。

この地域に昭和60年度より県営ほ場整備事業(月光川左岸地区)が計画されることになった。山形県教育委員会では数年来、県農林水産部や当該市町村教育委員会など関係諸機関と協議を行っている。昭和63年度に本遺跡を含む月光川左岸地区に県営ほ場整備事業が施工されることになり、県教育委員会では昭和62年10月15日・16日に遺跡詳細分布調査を実施し、東西約800m、南北約600mの約405,000m<sup>2</sup>の範囲を示す遺跡と確認された(註2)。

これにもとづき再度関係機関と協議を行い、昭和63年度に緊急発掘調査を行うことになったものである。調査は山形県教育委員会が主体となり、山形県埋蔵文化財緊急調査団が調査を担当した。調査期間は、昭和63年5月11日から9月8日までの延109日間実施した。

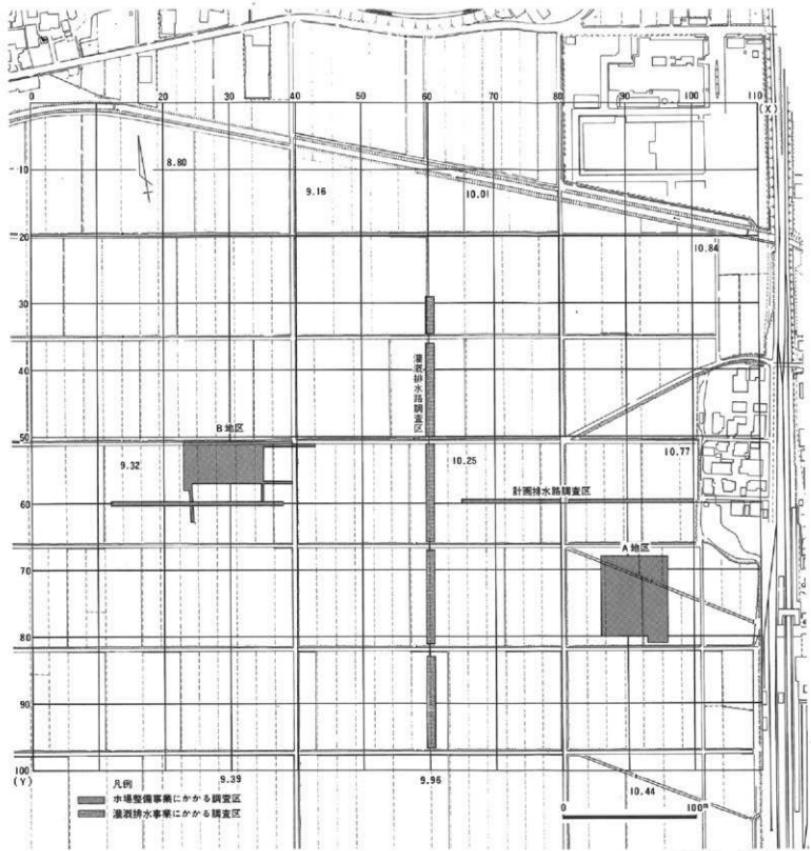
### 2 調査の経過(表2)

調査は昨年秋実施した遺跡詳細分布調査の結果に基づき、遺跡全域を包み込むようにほ場整備事業計画の排水路センター杭(No.5)を基点として5×5mで一単位とするグリッドを設定した。また調査の進行を3つの段階に分け、第1段階を分布調査で遺構・遺物が集中したJR遊佐駅の西側、85~94-68~80グリッドに精査区(A地区)を設定し、早期に調査を進める段階とした。第2段階は、A地区の記録作業を進めると同時に、ほ場整備計画の排水路地域の調査を開始した。66~99-59グリッドと、13~37-60グリッドとトレンチを配置し、重機による粗掘を行い面整理によって遺構・遺物の検出を実施した。また、この作業を進めると同時に分布調査で更に遺構・遺物が密集している地域に、グリッドの5単位に合わせたトレンチ(1×3m)を設定し、遺構の確認作業を実施した。その結果、23~36-51~57グリッドの範囲に、板材で囲まれた遺構の集中過所と、遺物が多量に検出される地域が確認された。このためこの地域をB地区と呼称し、重機による粗掘を行い面整理作業を実施した。面整理作業での検出遺構は、A地区で溝状遺構、土壙、旧河川や建物跡として組み合わさることが出来なかった柱穴、計画排水路地区では、溝状遺構、土壙、B地区では東西56m、南北36mの範囲を囲む板材列を、またその内側に建物跡や土壙・溝跡が検出された。

註1 山形県教育委員会「山形県遺跡地名表」 1963

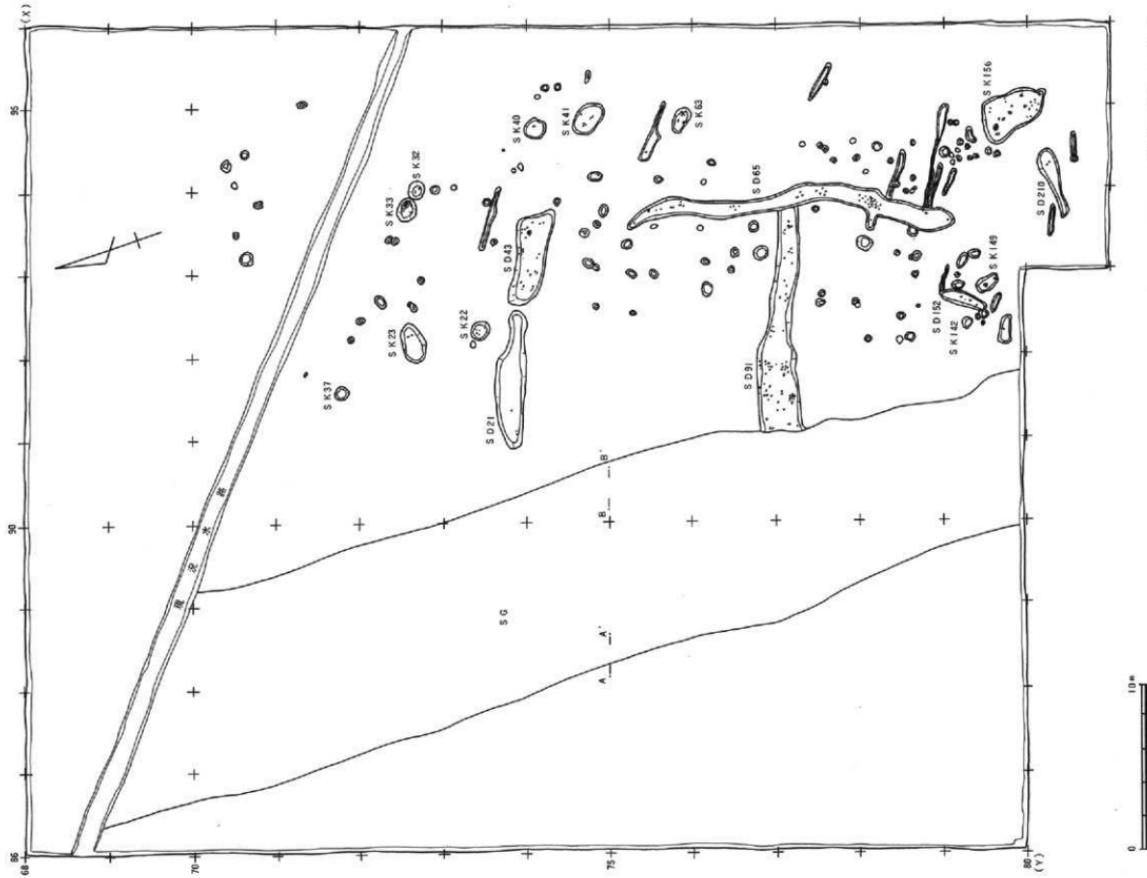
註2 昭和63年度「分布調査報告(15)」山形県埋蔵文化財調査報告書第199号 1967

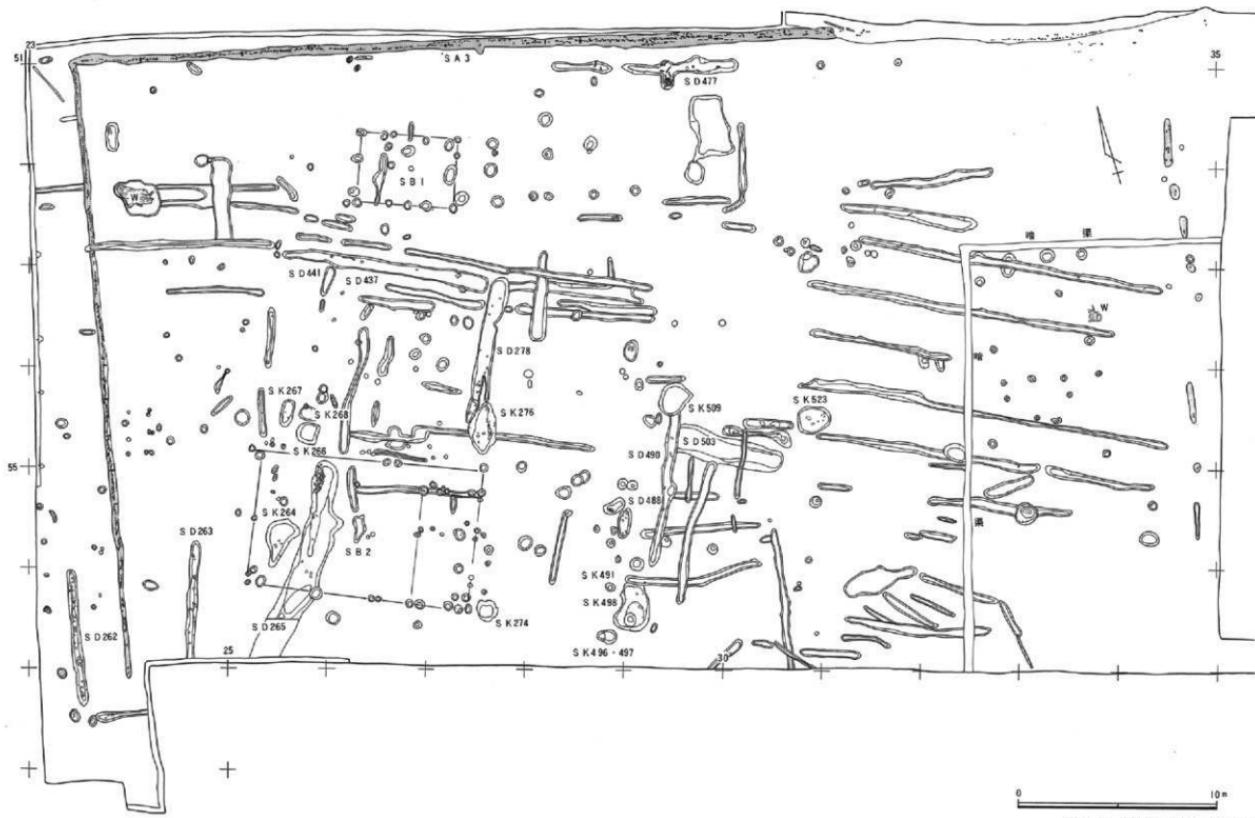
表 2 調查工程表



第3図 遺跡全体図

第4図 造構配置図 (A地区)





第5図 造構配置図 (B地区)

### III 検出遺構

#### 1 遺構の分布（第4・5図）

小深田遺跡の遺構・遺物が分布する範囲は、昨年度秋の遺跡詳細分布調査や今回のトレント調査等の内容を加味すると、東西800m、南北600m以上となり更に南方へ分布範囲が延びる結果となった。調査対象となる面積が約405,000m<sup>2</sup>という広大な遺跡範囲であり、分布調査の結果に基づいて調査区を設定したが、実際に発掘調査を成し得た面積は6560m<sup>2</sup>である。しかし、各調査区の遺構配置から遺跡範囲の分布状況は大方把握できる。

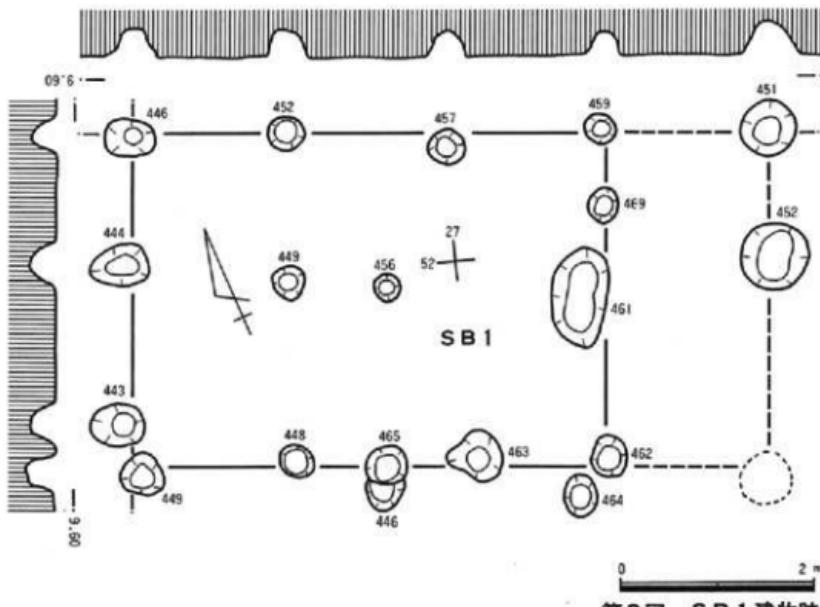
今回の発掘調査で検出された遺構は掘立柱建物跡2棟、匁形に囲む板材列1列、土壙85基、溝状遺構141条、時期不明の旧河川跡1条の他、建物跡として構成することができなかった多数の柱穴やピット等、登録した遺構は579を数える。地形的な要因による分布状況では、遺跡東部に設定したA地区の中央部を旧河川が南北に縦断し、その西側には遺構が確認できない。またこの河川跡は、灌漑排水路事業にかかる調査区60—74G付近でも東西方向で検出され、その北側に遺構が密、南側で疎の分布状況がみられる。これは、A地区西側で流れ込みによるシルト層が遺構確認面を広範に覆っていることから、河川左岸部はかつての氾濫原であったことが想定できる。A地区東側は土壙・溝跡等が検出され、さらに南東方向へ広がる傾向が確認できた。遺跡中央部に設定したB地区からは規則正しい遺構の配列が窺われ、その状況から西へ延びる様相を呈す。B地区遺構は、検出状況から大きく2つに群別が可能である。ひとつは磁北に対して西へ65°の、東西の身舎を構成する2棟の建物跡と、これに平行して走る溝状遺構群である。もうひとつの群は、これらに対して直交する主軸方向をもつ、上端幅の広い溝状遺構群である。さらに板材列西辺と平行する溝状遺構が2条、板列の内と外のY軸56Gの上に分布することも特徴的である。B地区南側に設定した計画排水路調査区からも土壙等遺構が検出されることから、その分布範囲は南へ広がると思われるが、南西方向にかけては基盤層が擾乱を受けているため明確な繋がりは判明できなかった。以下、各遺構毎に記述する。

#### 2 掘立柱建物跡

調査で掘立柱建物跡は2棟が構成できた。B地区の板材列に囲まれる内に位置し、同方向の主軸を測る2棟の建物跡である。柱配列や柱間距離が各面共に個々別々な配置をしているが、各々が建物跡の構成になる配置となったもので取り上げた。これらは古代平安時代、庄内地方における集落単位の一例としてあげられるため、確認できた内容を順に記述する。

### SB 1 建物跡 (第6図、図版7)

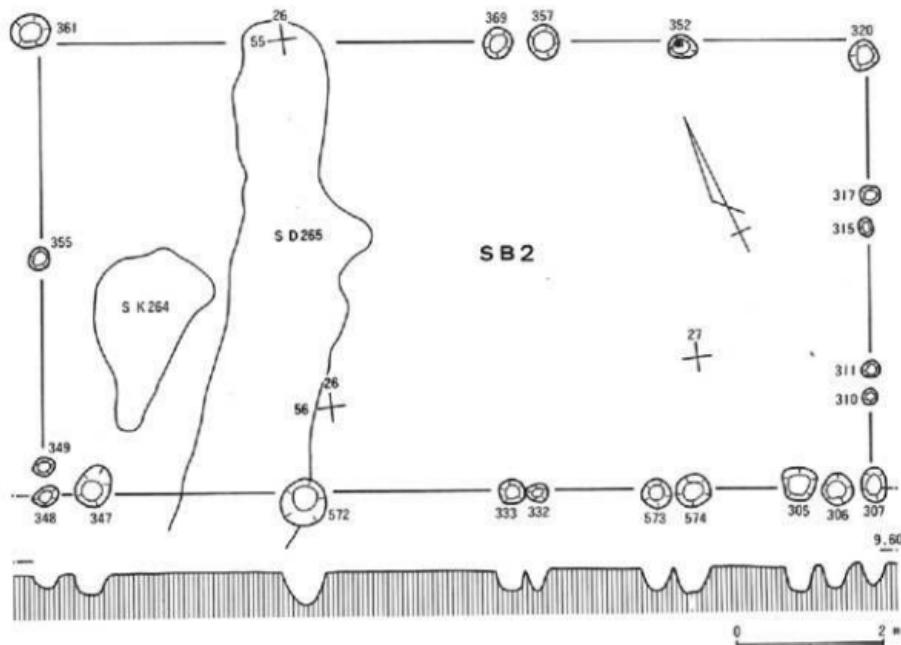
B地区北部中央寄り26・27—51・52グリッドIV層上面で確認された梁行2間、桁行3間の東西棟の建物跡である。身舎の梁行長3.5m、桁行長は4.9mを測る。柱間距離は身舎北面桁行EB446・452・457・459柱穴で西から1.5m(5尺)等間、南面桁行EB449・448・465・463・462柱穴で西から1.6m(約5尺)、0.9m(3尺)、0.9m(3尺)、1.3m(約4尺)である。西面梁行の柱間距離はEB446・444・449柱穴で北から1.3m、2.1m(7尺)、東面梁行EB459・461・462柱穴で北から1.8m(6尺)、1.5mを測る。西面南角のEB449北隣にその控え柱と考えられるEB443柱穴が位置し、また東面梁行のEB469柱穴は身舎の補強に用いられた柱穴と推測される。北面桁行東方延長線上にはEB459より1.8mを測る位置にEB451柱穴が存在し、その96°直角方向に柱間1.3mを経てEB452柱穴が確認できた。EB452は、西面梁行と相対することから桁行4間の構造になるとと思われたが、この延長線上で東面南角に当たる柱穴は検出できなかった。身舎各面の柱配列・柱間距離とも違いを示すが、柱間が等間隔で並んだ北面桁行を基準に、建物跡として構成できる柱穴を線上に組み合わせて認めるものである。身舎の東西主軸方向は、磁北を基準としてN-25°—Wである。柱穴掘り方は円形ないし梢円形を呈し、検出面からの深さ25~35cmを測るが、出土遺物はEB449柱穴よりわずかに須恵器片1点が出土したのみである。



第6図 SB 1 建物跡

### SB 2 建物跡 (第 7 図、図版 7)

B地区南部中央寄り、SB 1 の南に当たる25~27—54~55グリッドIV層上面で検出された、SB 1 の主軸にはほぼ平行する梁行 2 間、桁行 4 間の東西棟を構成する主屋的な掘立柱建物跡である。身舎梁行長 6 m、桁行長は 11.2m を測る。建物中央西寄りを SD265 滝状遺構が南北に継続し、南北面桁行柱穴と一部重複関係にある。柱間距離は身舎南面桁行 EB348・572・333 と 332・574・307 柱穴で西より 3.6m (12 尺)、3 m (10 尺)、2.1m (7 尺)、2.4m (8 尺)、北面では南面の EB572 に相対する柱穴が、その位置する 26—55G 付近を SD265 が切っているため確認不可能であった。しかし存在したと仮定すれば、北面桁行も南面同様の柱間距離を測る。西面梁行は EB361・355・348 柱穴で 3 m 等間、東面は EB326・317 と 315・311 と 310・307 柱穴で北から 2.1m、2.4m、1.5m (5 尺) である。梁行・桁行面とも EB333・332 のように小柱穴が隣合わせに 1 組で検出された部分があり、柱 2 本を用いて 1 組としていた可能性がある。また建物南面の東西角部では、隅柱の補強と推定される柱穴 EB349・347、EB305・306 が桁行梁行線上に並ぶ、SB 1 同様それぞれ柱間距離や位置が違うが、柱根が残存していた EB352 柱穴を基点にして、建物跡として構成できる柱穴を組み合わせたものである。柱穴掘り方は径 20~60cm、検出面からの深さ 18~40cm の円形ないし隅丸方形を呈する。これらからは計 13 点土器片が出土している。



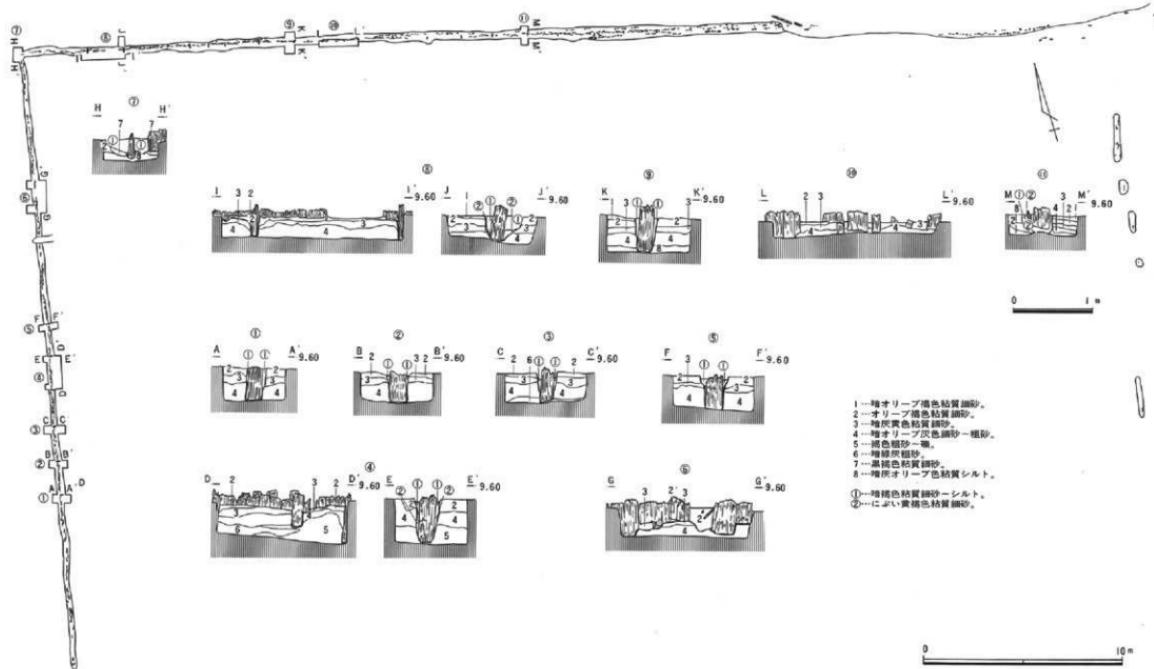
第 7 図 SB 2 建物跡

### 3 板材列

県内で板材列を伴う遺跡は今まで 4 遺跡が確認されており、いずれも庄内地方の平野部、酒田市に位置する沼田・生石 2・南興野・熊野田の各遺跡である。これらは、城輪柵跡を中心とした方格地割を想定した場合南北軸線上に並び、生石 2 遺跡をその南東部の要に、熊野田遺跡は南西部の要と推測され、板材列に囲まれる内部には公的な施設が存在していたと考えられる遺跡群である。日向川以北の飽海地区においては本遺跡が初めての例であり、その意味では注目される遺構である。以下に、その検出状況および構築方法を中心に確認できた内容を記述する。

#### S A 3 板材列（第 8 図、巻頭カラー、図版 8・9）

B 地区周縁部に南側を除いて検出された。△型に巡る板材列である。層序Ⅲ層下部もしくはIV層直上面で矢板頭部が確認された。検出長は西辺南北板材列が 31m、北辺東西列は西から 38m の連続検出の後、耕地整理以前の用水路によって一旦切られることになるが、56m 地点で用水路との境界付近に同様な矢板が発見され、しかも南方へ延びる向きに変わることから、この部分を北東角部と認めたことにした。東辺南北列の検出は断続的で、矢板も横一列に並ばず不規則であるが、検出長は 22m を測る。南側については、西側板材列がさらに南へ続くものと考えられ、延長線上を線掘りで追求したが地盤が徐々に低くなることから発見されず、したがって南辺列についてもその存在が不明な所となっている。矢板列の掘り方は幅 20~70cm、検出面からの深さ 5~14cm の布掘りと呼ばれる掘り方に、矢板が打ち込まれた状態で検出された。矢板は幅 10~25cm、厚さ 1~2cm で、先端を水平に切り揃えたものや斜めに削り切ったものである。西辺南北板材列は、その南端の検出部よりほぼ磁北に沿う N-12° E の角度で横一列に打ち込まれ、離して並べた矢板の隙間部では内側に同様な矢板を設置して、隙間が埋め合わさるよう交互に板を配列した二重構造となっている。北西角で直角に東へ折れ北辺を築く板材列は、部分的に 2 列となり 29-50G では 3 列に矢板を並べている。板材列中には 1.8m(6 尺) 又は 0.9m(3 尺) 每に、矢板列を直角に区切るしきり板が存在する。さらに西辺外側には、これらしきり板と対応する板材が 3~3.3m 離れて配列することから、板塀を支えるような添え木構造を施した可能性が窺われる。しきり板は幅 12~22cm、厚さ 5~10cm で、柾目材を斧により割断し四面と打ち込み先端部を手斧で削り調整している。検出長は 24~61cm を測り、布掘り検出面よりさらに掘り込んで板を打ち込んでいる。掘り方埋土は 2 層に分かれ、布掘り部と合わせ総計 460 点の土器が出土している。本板材列は南辺を除き東西北に囲むものであるが、遺存状態の良好な矢板列が連なる西・北辺に比べ東辺はあまりに粗雑すぎる。この地方の冬に北西の強風が卓越することを考え合わせ、本来より西と北に巡らした遺構との推測も可能である。



第8図 SA3板材列

## 4 土 壤

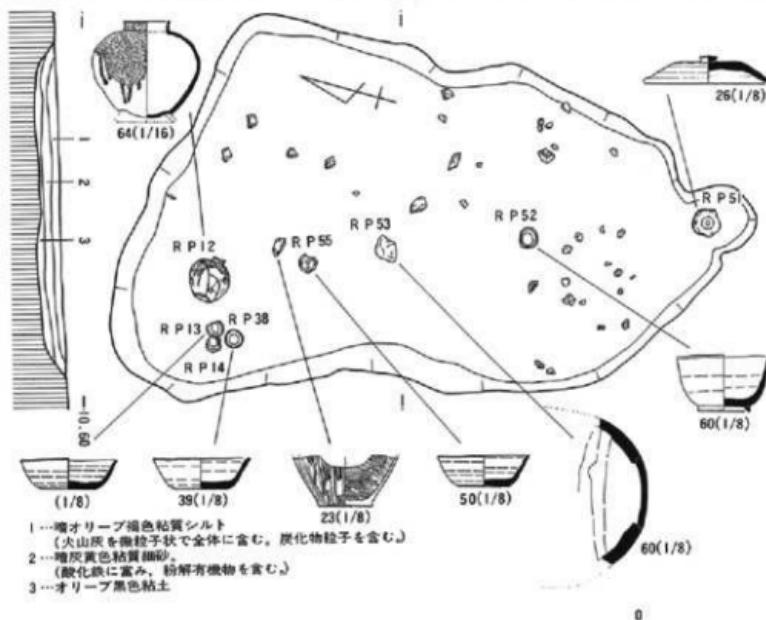
調査で土壌と確認され登録した数は85基を数える。これらは平面形や断面形、あるいは覆土の堆積などからいくつかの形態に分類することができる。ここではA地区・計画排水調査区・B地区の各調査区毎にまとめ、覆土内に完形土器または多数の土器片を包含する土壙を中心に、形状分類したいくつかの類例について記述する。

### (1) A 地区検出土壙

#### S K 156 土壙 (第9図、図版10・14・15)

南東隅部94・95-79・80G IV層上面で検出された不整の隅丸四辺形を呈する土壙である。規模は南北長軸3.8~4.5m、東西短軸1.1~2.7m、確認面からの深さ13~17cmを測る。断面形は皿形を呈し、壁面はほぼ均質に急激な立ち上がりを示す。床面は中央部分でやや山なりに盛り上がるがほぼ平坦である。層序は自然堆積の様相を示し、覆土は3層に分かれ。る。覆土1層からは、粒子状で全体に混入する灰白色の火山灰ブロックが確認された。

本土壙内からの出土遺物総数は642点すべて土器である。F<sub>1</sub>層からの出土が最も多く497点を数え、壙床面でも55点の土器が出土している。遺物番号を登録して取り上げた完形もしくはそれに近い土器には、口縁と底部の一部に高台を欠いた他は完形で出土した須恵器短頸壺をはじめ15点に及ぶ。本土壙の時期は出土土器により9世紀前後に比定される。



第9図 SK 156 土壙

### S K23土壤 (第10図)

A地区やや中央北東寄り、91・92-72GIV層上面で確認された土壤である。平面形は東西に長い橢円形を呈し、断面形は船底形となる。規模は東西2.2m、南北1.3mで検出面からの深さ約30cmを測る。周壁は急激に掘り込まれ東半部がややすまる。底面はほとんど平坦である。覆土は6層に分かれ、その中位で薄く堆積する酸化鉄に富む砂層以下は無遺物層である。出土遺物は土器だけであり、計49片を数えるがいずれも破片資料で、須恵器5点、内黒土器1点、赤焼土器43点の内訳で、すべて土壤東半部から出土している。

### S K33土壤 (第10図、図版11)

S K23より東へ8m、93-72GIV層上面で検出された隅丸方形を呈する土壤である。断面形は台形を呈し、底面からの立ち上がりは比較的急である。規模は長径1.5m、短径1.2mで確認面からの深さ28cmを測る。床面は起伏があるもののほぼ平坦である。覆土は3層に分かれ粘質シルト土を基調としているが、覆土下半部は酸化の激しい砂層である。壇内よりF<sub>2</sub>層を中心に96点の土器が出土しており、細片であるが土師器2片を含む。

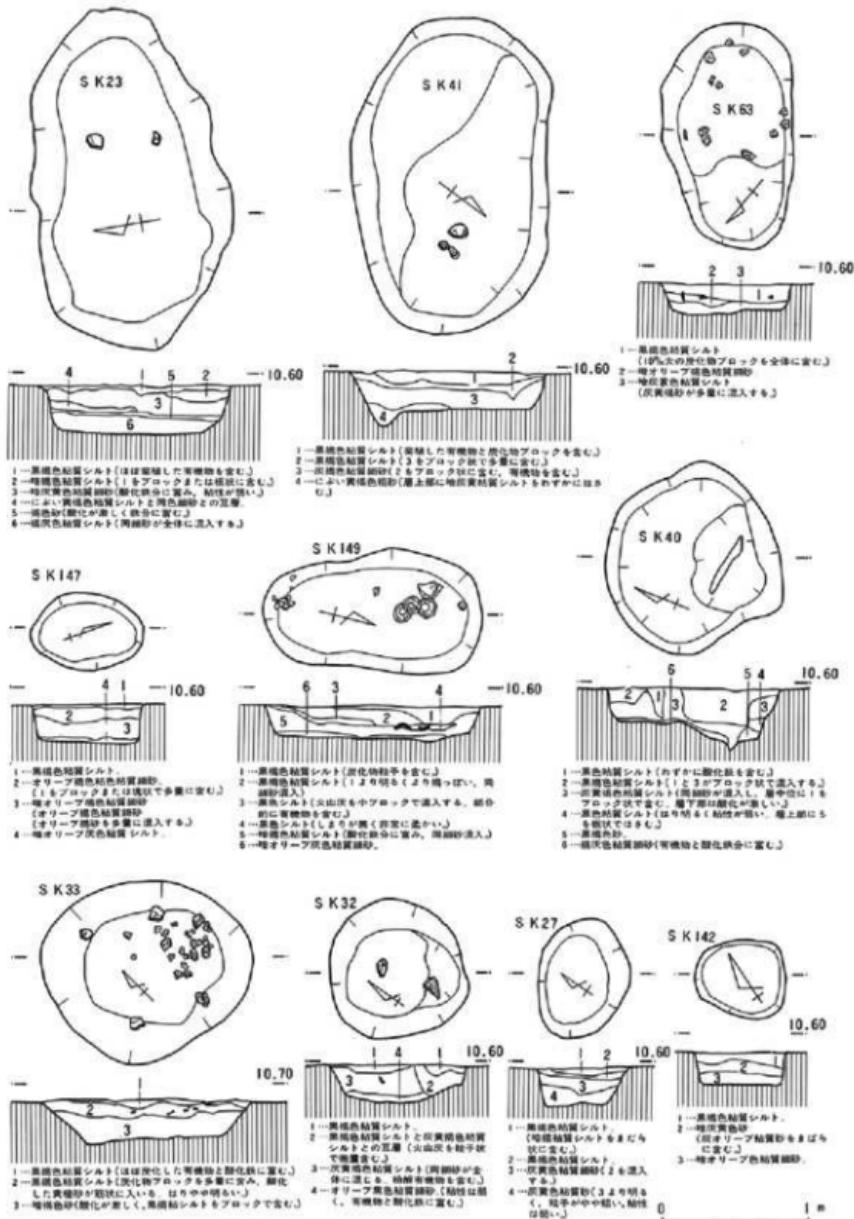
隣合わせに位置するS K32土壤(第10図)は東西南北とも1mのほぼ円形を呈する土壤である。断面形は船底形で壁面の立ち上がりは急激であり南東部では中に緩やかな段を作る。本土壤は覆土の断面観察より、南東部に広がるF<sub>2</sub>層が縦に他の土層を切っていることから、南東部をピット状に再度掘り込んだことが解かる。しかし平面形から切り合いの関係は区別が困難であった。遺物は須恵器・赤焼土器片11点が出土している。

### S K63土壤 (第10図)

東側中央付近、94-75Gで検出された平面形が橢円形で長径1.6m、短径0.9mの規模を呈する土壤である。断面形は鍋形となり最深部まで確認面より21cmを測る。床面は中間部で段を作り、南東に向かってなだらかに落ち込んでおり、比較的凹凸がある。覆土は炭化物を含む粘質シルト土を基調とし、3層に分かれる。壇内からはF<sub>2</sub>層より出土した赤焼土器片(第23図90)を含み36点の土器が出土している。これら出土土器により本土壤の時期は、平安時代10世紀前半頃に比定される。

### S K149土壤 (第10図、図版11・15)

南縁部東寄り、S K156より西へ9mの92-79Gで確認された土壤である。長軸1.5m、短軸0.7mの中央でやや内側に窪む双円形を呈する。断面形は台形で周壁は急激に立ち上がるが、底面はほぼ平坦に推移し最深部で23cmを測る。覆土の堆積は6層に分けられるが、基本的には褐色粘質土と炭化物層(黒色シルト)が互層を成す。土壤北側中央部には完形の赤焼土器壺が3個体となって出土した。出土土器はF<sub>1</sub>,<sub>2</sub>層から28点、F<sub>3</sub>層5点、F<sub>4</sub>層4点、F<sub>5</sub>層3点で計40片を数える。時期は他の土器とも対比して10世紀後半と推定される。



第10図 S K23・27・32・33・40・41・63・142・147・149土壤

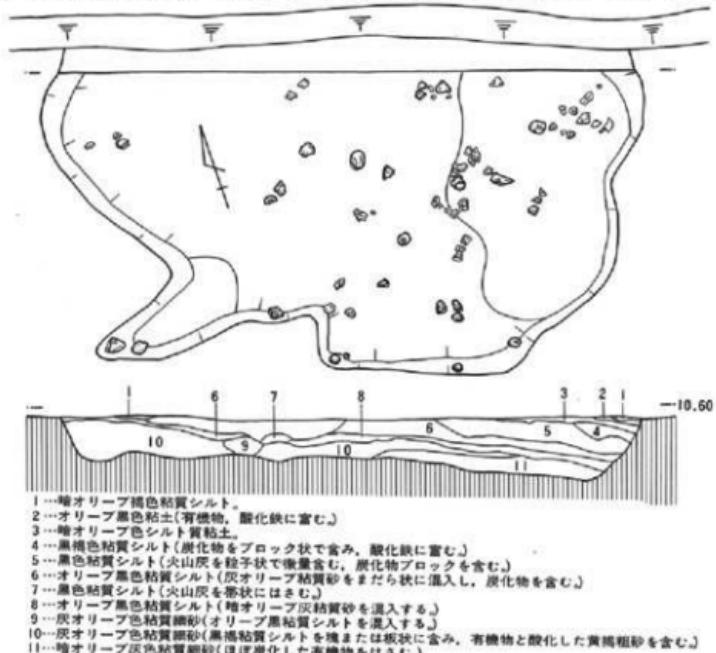
## (2) 計画排水路検出土壙

### S K 203土壙 (第11図、図版11)

東側計画排水路調査区の東部中央、89-59G III層下面で確認された土壙である。南半部の検出で、その北側は未調査区域のため全体の規模は不明である。検出規模は東西4.1m、南北2.3mの不整の半円、南西部で凸となる平面形を呈する。壁の立ち上がりは均質で急激な傾斜を示す。床面は起伏に富んで東側・南西部の2ヵ所でさらに落ち込み、検出面からの深さ26~44cmを測る。覆土の分類は11層が考えられるが、基本的には東部表層の粘度質全体を覆い炭化物に富むシルト層、その下面の細砂層に分けられる。本土壙からは黒色土師器1点を含め265点の土器が出土した。これらから比定する時期は9世紀前半頃である。

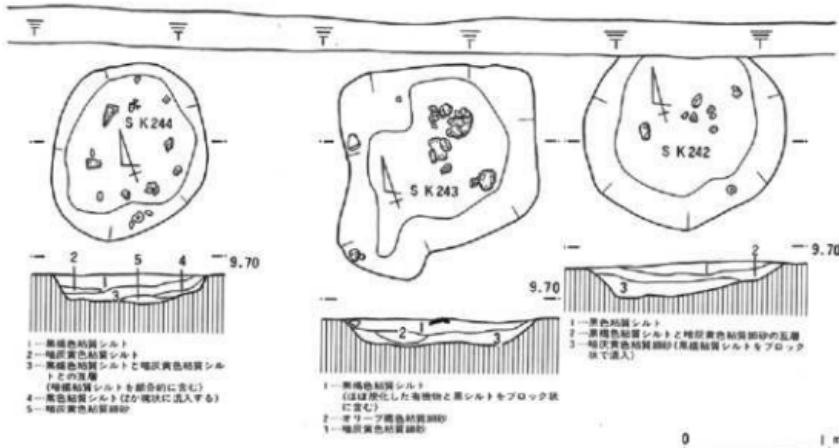
### S K 242・243・244土壙 (第12図、図版11)

西側計画排水路調査区26・27-59G IV層上面で検出された。B地区遺構群に付随すると考えられる横一列に並ぶ土壙である。S K 242は径約1.4mの円形を呈し、ゆるやかに掘り込まれている。S K 243は南西角が大きく広がる隅丸方形で、周壁は不均質でゆるやかに立ち上がり、断面形が船底形となる。S K 244は不整円形を呈し長径1.3m、短径1.1m、深さ



第11図 S K 203土壙

20cmを測る土壌である。覆土は各土壌とも同質の壤土を基調としており、3層または5層に分かれる。出土遺物は須恵器・内黒土器・赤焼土器の3種で、SK242で83片、SK243に43片、SK244は115片の土器が出土している。



第12図 SK242・243・244土壌

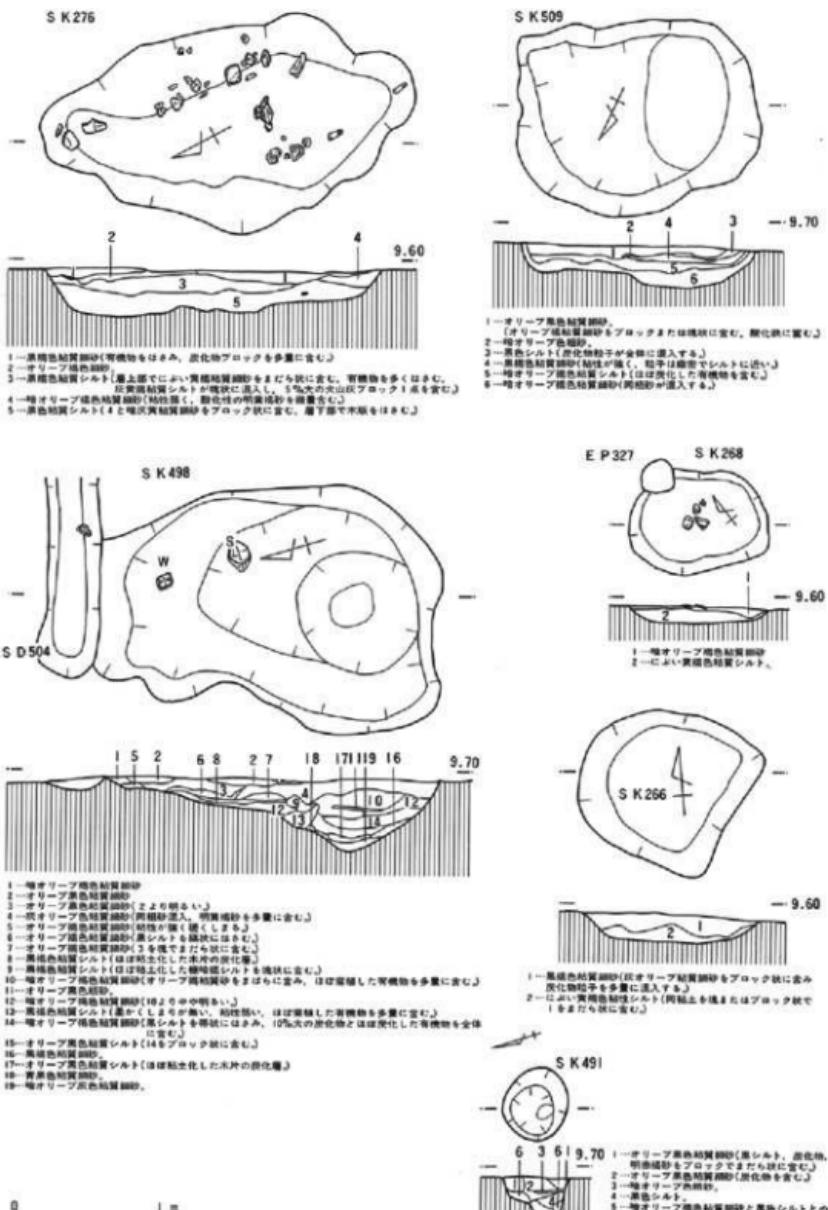
### (3) B地区検出土壌

#### S K276土壌 (第13図)

調査区中央部西寄り、SB2建物跡の北隣り27-54GIV層上面で検出された。平面形が隅丸の菱形を呈する土壌である。規模は南北長軸2.1m、東西短軸1.4m、検出面からの最深部35cmを測る。凹凸が激しい底面から立ち上がる壁面は、南北で急激に東西ではゆるやかな傾斜を示す。覆土は5層に分かれ黒褐色粘質土を基調としており、有機物を多くはさむ腐植土壌である。中位のF<sub>3</sub>層には一部火山灰が認められた。壙内からは総計178点の土器片が出土した。いずれも破片資料で実測できたものは第23図89の底部に墨書きの有る赤焼土器壙の1点だけである。時期は他の土器とも対比して9世紀前半に位置付けられる。

#### S K498土壌 (第13図、図版10)

中央部南側の28-29-56Gで確認された土壌で、平面形は不整の隅丸台形を呈するがその北辺部をSD504溝状遺構によって切られている。断面形は南に窪む南側中央部分から立ち上がる周壁は、途中に段を作りながらきわめてなだらかに上端部へ向かう。覆土は19に分けられる埋土が複雑に堆積しており、粘土化した炭化物層が随所にはさまる。本土壙からの出土遺物は層上部より須恵器片2点と赤焼土器片7点が出土したのみであった。



第13図 S K266・268・276・491・498・509土壤

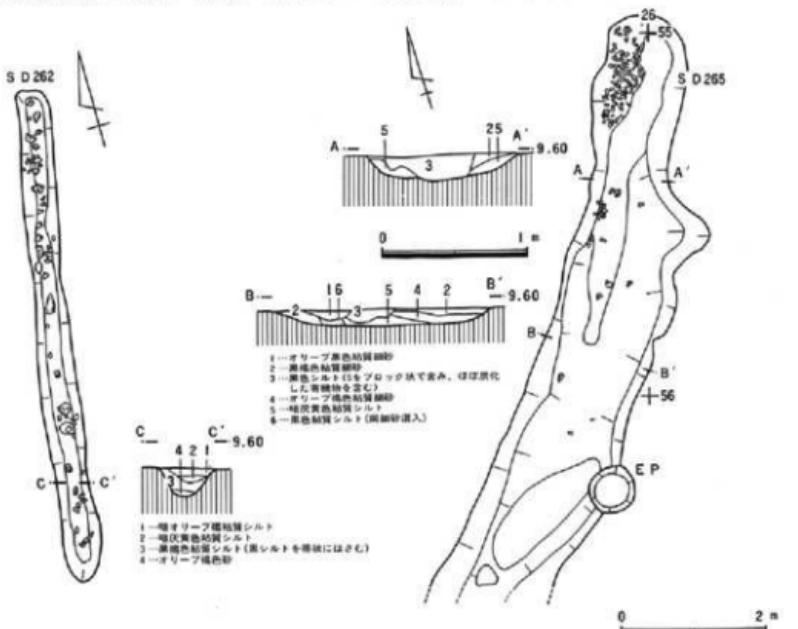
## 5 溝状遺構

本遺跡で検出された溝状遺構は141条におよび各調査区で確認されているが、計画排水路区は幅3mの線掘りによるトレンチ調査であるため、溝状遺構の一部分を検出したにすぎない。したがってここでは、面的に掘り広げたA地区・B地区検出の代表的な溝状遺構について、その規模・内容・出土遺物等を記述する。

### S D262・265溝状遺構（第14図、図版13・15）

S D262はB地区西縁南部23-56Gで確認された。S A 3板材列西辺に平行し南北に走る溝状遺構である。南北長6.8m、幅36~54cm、深さ約20cmを測り、断面形はU字状を呈す。主軸方向はN-13°-Eである。出土遺物は須恵器31点、内黒土器44点、赤焼土器66点が出土しており、半完形土器が遺構内全体に散布している。底面レベルでは北部が幾分高く南端とのレベル差は8cmである。本遺構は規模や形状、板材列との位置関係から、一時的な水溜め機能を有した治水施設と想定される。また出土遺物状況からその後廃棄溝として利用されたことが窺える。時期は出土土器により8世紀後半に比定され、覆土の埋土がS A 3埋土と基本的に一致することから、板材列と同時期に存在したと捉えられる。

B地区南西側S B 2建物跡と重複して検出されたS D265は、主軸方向N-25°-EでS B 2東西梁行に並行して南北に掘り込まれた溝状遺構である。規模は最大幅1.8m、最小幅



第14図 S D262・265溝状遺構

1m、検出長10.5mを測りさらに調査区外南西方向へ延びる。底面は凹凸が激しく段を作り部分的に深くなる。底面レベルでは窪み部を除けば全体にはほぼ平坦で差がない。覆土は6層に分かれるが、北部は全体に焼けており黒色を呈すお焼土が表面を覆う。出土遺物は総計963点を数え、土器の他砥石が1点出土している。土器の大半が北半部より出土し、特に焼土層上面では密集しており、土器細片を數き詰めた状態が窺われた。これら出土土器とSB2との重複を考慮して、時期は平安時代9世紀前半に位置付けられる。

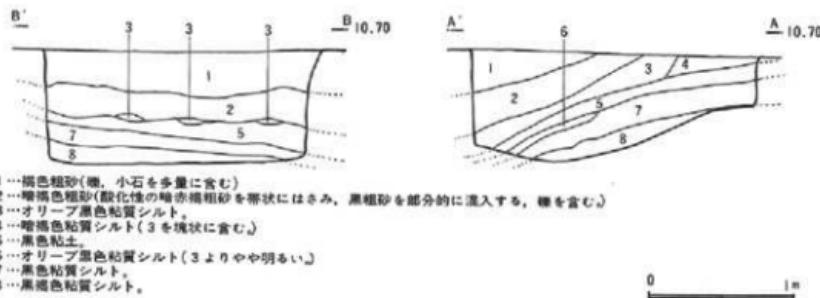
#### その他の溝状遺構（第4・5図）

B地区で検出された溝状遺構群は「遺構の分布」で前述したように、主軸方向により2群に大別できる。すなわち、1群は2棟の建物跡に平行して掘り込んだ遺構群で、調査区東側では畠状の規則的な配置を成している。別の1群はこれらに直交する形で掘り込まれた遺構群であり、SD278・490には出土遺物が多い。しかしこれら2群の切り合いが一定ではなく、時期的な見地に立てばさらに細分が可能なため、今後の検討を要する。

A地区に分布する代表的な溝状遺構はSD65・91（図版12）の2条である。SD65は幅約1.2m、検出長20mの南北に走る溝状遺構、SD91は幅1.4~2.6m、検出長13mで東端をSD65によって切られる東西に走る溝状遺構である。この2条は東を天にしてT字形に交錯し、SD91は旧河川跡へと繋がる。溝内底面レベルではSD65が両端に高く、中央の交差部へ向かう程低い。またSD91は西に向かって低くなり12cmのレベル差を生じる。覆土の堆積状況および出土土器によれば2条の時期的な差はない。これらのことから、水の流れを推定すれば旧河川跡へ流れ込む排水溝との想定が可能である。

#### 6 旧河川跡（第4・15図）

A地区中央より西侧を磁北に沿って南北に走る形状で検出された。検出最大幅12.4m、最小幅8.2m、検出長58mを測る。Y軸75グリッド線上での土層観察では、川底中央へ向かって徐々に傾斜する自然堆積の様相が窺い知れる。表面は礫・砂利を含む粗砂層が厚く堆積する。遺跡北側を月光川が西流することを考えれば、蛇行する旧支流の一部と思われる。



第15図 旧河川跡土層断面

# IV 出土遺物

## 1 遺物の分布

小深田遺跡で出土した遺物は整理箱にして土器が106箱、木製品31箱で、中近世の陶磁器片、土製品等まで含めた総数は破片を1点とした場合54,000余点を数え、出土地点と種別の内訳は下表に示す通りである。全体の遺物分布とその密度をみた場合、おおよそ遺構の分布状況と軌を一いしていると言える。遺跡範囲における分布状況では北半部に集中する傾向を示し、A・B調査区を設定した地区に当たる。これらの南西・南東部でも出土量は多いが、南西部では遺構が確認できなかった。耕地整理で基盤層が破壊を受けていることもあり、土器片が散乱したものと考えられる。以下では、各調査区グリッド毎の遺物分布状況とその特徴について概述する。

A地区包含層として取り上げた遺物は、拡張区を含めた面積3,075m<sup>2</sup>で23,450点におよぶ。調査区をX軸91の軸線で区切り東と西に分けた場合、東側に西側の約3倍の出土量がある。このX軸91グリッド線は、西側の旧河川跡と東側の検出遺構との境界線をなし、A地区遺構はこのラインを西限として東へ広がる。さらにY軸72・76の軸線により調査区を6等分した場合、東側南部に最も多く出土し、(9,689点)、次いで東側中央部に多い。A地区包含層の遺物出土状況は、遺構の分布状況と全く軌を一にしていると言って良い。B地区や計画排水路調査区においても同様の傾向を示す。B地区で注目される分布状況は、SK276・S D278を中心とした27-53・54Gブロック、S D265とSK266等を中心とする25・26-54・55Gブロック、それにSD503よりSK523に至る29・30-54・55Gブロックの3ヵ所で特に遺物が集中する。地形的・層位的な問題を多分に含むが、投捨場として意識された箇所への集中的な廃棄と考えて良いだろう。これら出土した多数の遺物は、古代当地で生活した人々の歴史や文化を考える上で貴重な資料である。

表3 出土遺物点数表

出土地区	地番	面積	全量	空量	生量	組別	出量	出量	高量	低量	土器品	石器品	木製品	漆器	羅織	その他	計
A	S D	7	441	10	249	2084											1 2792
	S K	6	363		22	820											1211
	E P	16			6	88											110
B	S B	2		2	10												14
	S A	1	200	1	28	254	1	2	1								488
	S D	7	1012	12	322	2498											1 3853
区	S K	12	164	1	60	499											736
	E P	1	81	1	14	187											284
	SD	1	77		59	479											616
排水路	S K	66	2	44	541												653
	E P				6												6
	その他																58
合	II		5		1	31			1								38
	III	177	10546	50	1614	13649	16	1	43	9	9	12	11	2	3	27	36169
	IV	14	472	8	215	3703			4	1	1	1					3 4422
TT	T	1	634	3	104	1422	8	4	17	1	1						1 2198
	X-O	101	9	12	255		1	1	1								381
	合	227	14180	97	2752	36626	26	8	67	11	66	15	11	4	3	33	54629

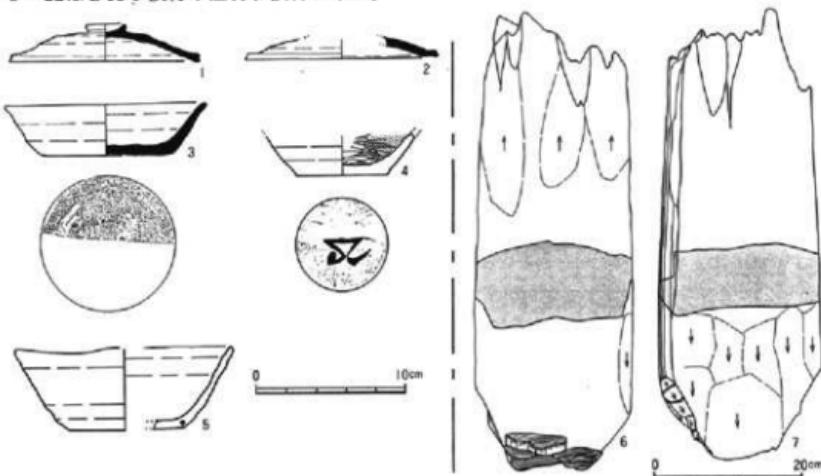
## 2 遺構内出土遺物

小深田遺跡の調査では各遺構から多少を問わず遺物が出土している。特にA地区SK159土壌からは、土器の他、土鐘等の生活に係わる遺物が出土している。また周囲の包含層からはA地区遺構内出土の遺物より一時期古いものが出土している。B地区では溝状遺構から一括となる土器片が出土した。以下遺構毎にその概要と推定時期について述べる。

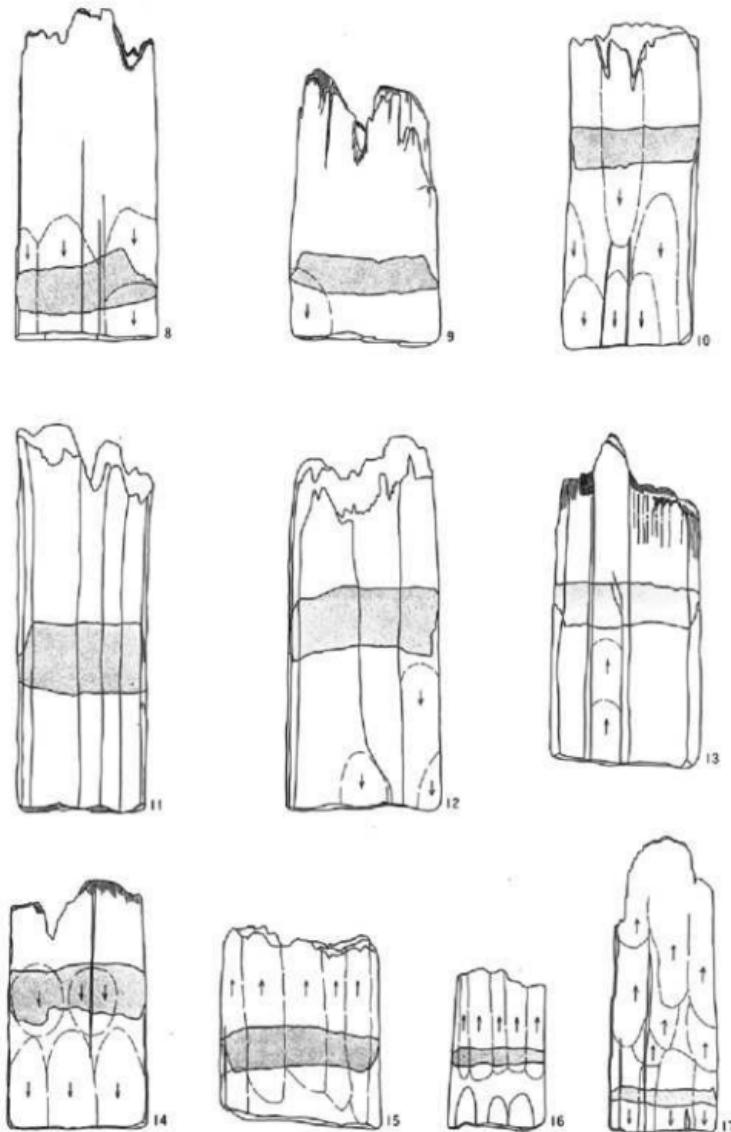
### (1) 柱穴跡、板材列出土遺物（第16・17・18図、図版16）

調査で確認された柱穴掘り方の埋土から14片の土器片が出土している。またSA3板材列の布掘り部分からは488片の土器片が出土した。いずれも細片で測図に堪えるものは少ないが、遺構の時期を示す土器を第16図に示した。

柱穴跡出土遺物は土器片だけである。その内訳は、須恵器2片、内黒土器2片、赤焼土器10片であるが、その中でも、EP441柱穴からは須恵器蓋1のほぼ完形品が出土した。体部がやや丸味をもち、天井部は回転ヘラ切りによって切り離され、中央部が窪むつまみがつけられている。2はEP356柱穴出土の須恵器蓋片である。口唇端部がやや上反し、端部を丸味をつけながら重下し内湾する。内面は二次利用された転用窓となる。3はEP206柱穴出土の須恵器坏である。口径に比し底径が広く身が浅い。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、中心部にヘラおこし痕を残す。5は、EP337柱穴出土の赤焼土器坏である。底部の切り離しを回転糸切りとし、体部に明瞭なロクロ痕を残す。4は内黒土器坏底部片である。内面にヘラミガキ後黒色化処理を施している。底部を回転糸切り離しし、底面に「凡」と考えられる墨書きが書かれている。これらの土器片の時期は平安時代9世紀代があてられる。6～22はSA3板材の仕切り板材である。

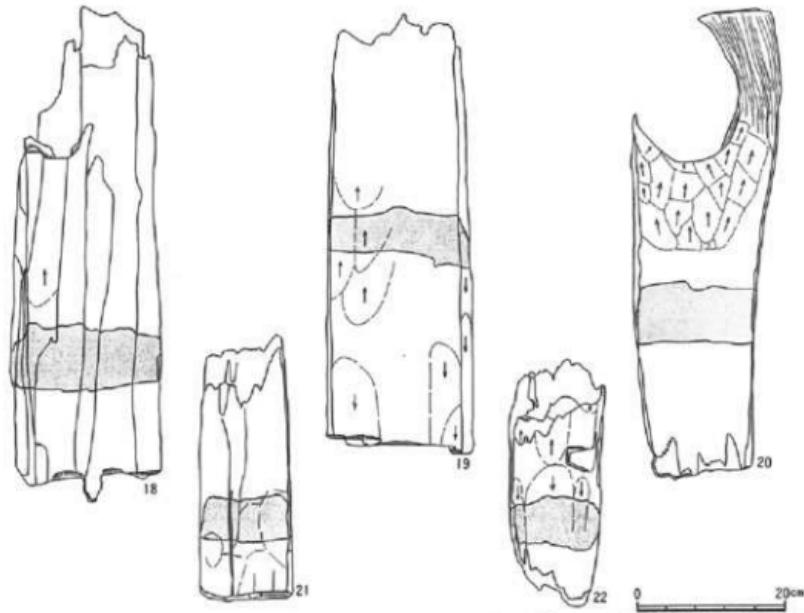


第16図 柱穴跡・板材列出土遺物



0 20cm

第17図 S A 3板材列しきり板(1)



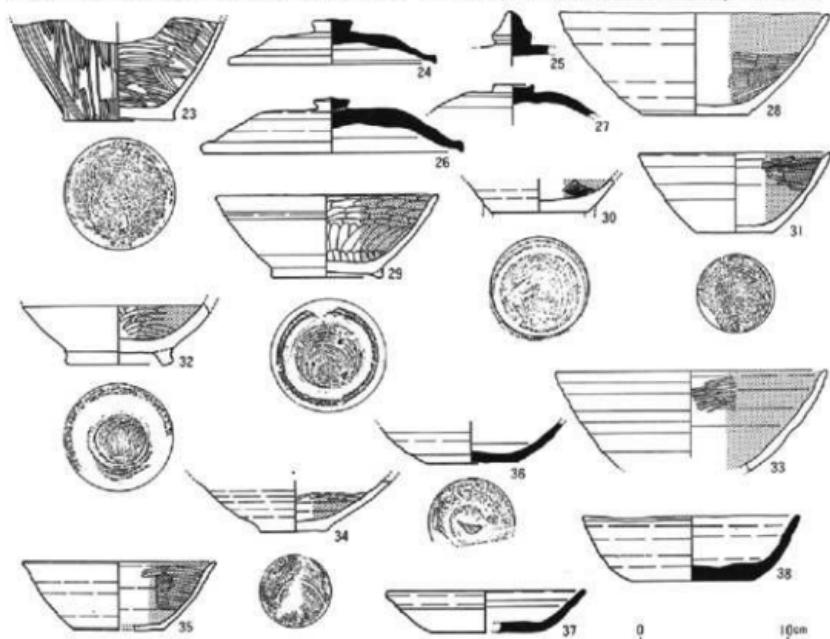
第18図 SA 3 板材列しきり板(2)

表4 柱穴跡・板材列遺物観察表

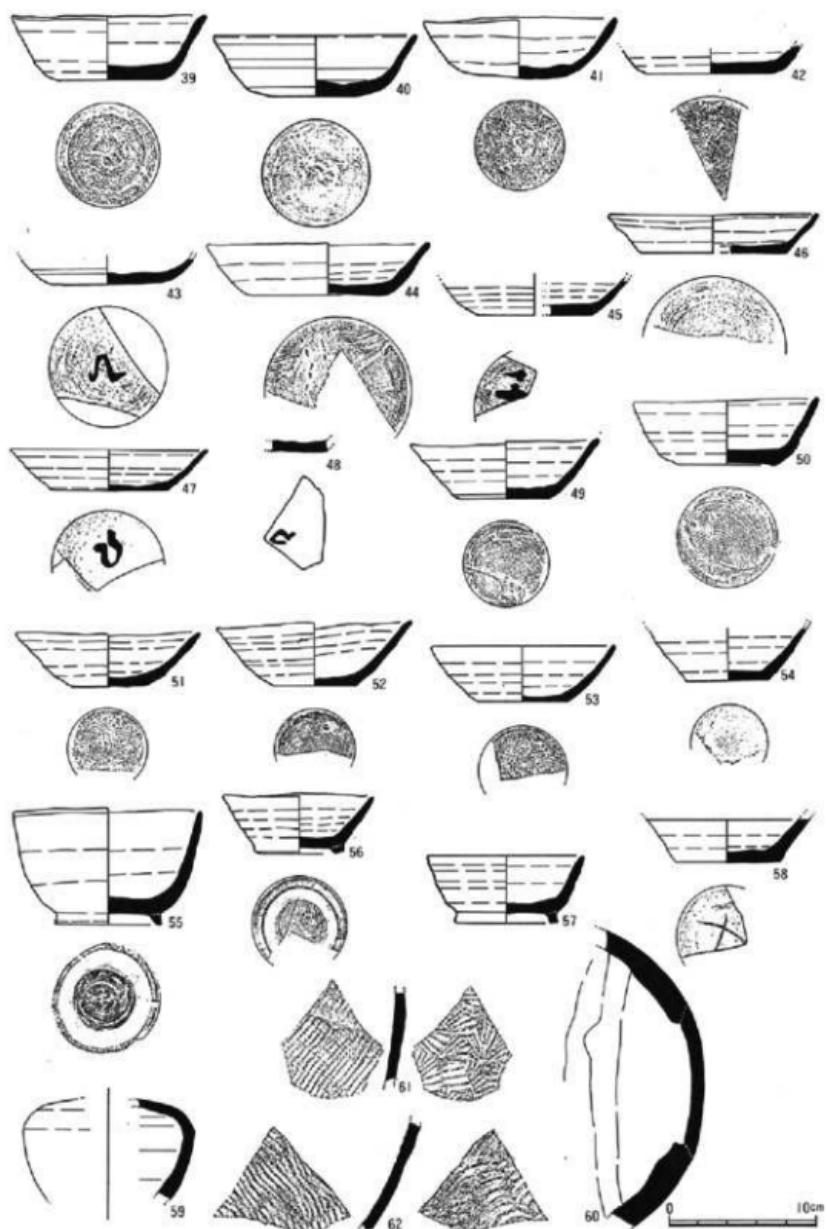
探 査 回 数	遺 物 番 号	形 態 種 類	計測値(m/m)		色	調	塗 土	焼成	底部切離	調 整 技 法・備 考	出 土 地 点 層 位	
			口径	底径								
16 回	1	實 惠 器	盤 (128)	(25)	Hue 10BG 7/1 灰青灰	黒 密	堅		ロクロ黒		E B-441-F	
	2		蓋 (130)	(13)	Hue 7.5Y 7/1 灰白	黒 密	堅		ロクロ黒 外間に墨痕 輪用縫		E P-356-F	
	3		环 137	92	Hue 2.5G Y 7/1 明褐色~灰	黒 密	灰 ベラ切		ロクロ黒		E P-206-F1	
	4	内墨土器	环 62		Hue 2.5Y 7/1 灰 青	細砂混	良	回転糸切	ロクロ黒 削り	墨跡に墨痕	S A-3-F	
	5	漆墨土器	环 (148) (78) (56)		Hue 7.5YR 7/6 墨	粗砂混	良	回転糸切	ロクロ黒		E P-337-F	
	6	板 状 加工木	(幅2×高さ厚)		(幅2×高さ厚) 新目材。刃により割断。四面を手斧で調整。下端部手斧痕。							S A3, A-81
	7		614×210×102		新目材。刃により割断。四面を手斧で調整。下端部手斧痕。							S A3, A-92
17 回	8	板 状 加工木	432×185×77		新目材。刃により割断。四面を手斧で調整。下端部手斧痕。							A-92
	9		358×204×51		新目材。刃により割断。四面を手斧で調整。下端部手斧痕。							A-122
	10		420×174×56		新目材。刃により割断。四面を手斧で調整。下端部手斧痕。							S A3, A-188
	11		510×161×95		新目材。刃により割断。四面を手斧で調整。下端部手斧痕。							S A3, A-203
	12		475×190×86		新目材。刃により割断。四面を手斧で調整。下端部手斧痕。							S A3, A-217
	13		425×175×60		新目材。刃により割断。四面を手斧で調整。下端部手斧痕。							S A3, A-253
	14		330×185×72		新目材。刃により割断。四面を手斧で調整。下端部手斧痕。							S A3, A-242
	15		235×193×55		新目材。刃により割断。四面を手斧で調整。下端部手斧痕。							A-257
	16		260×130×24		新目材。刃により割断。四面を手斧で調整。下端部手斧痕。							S A3, A-287
	17		393×145×22		新目材。刃により割断。四面を手斧で調整。下端部手斧痕。							A-210
18 回	18	板 状 加工木	578×180×90		新目材。刃により割断。四面を手斧で調整。下端部手斧痕。							S A3, A-211
	19		574×175×60		新目材。刃により割断。四面を手斧で調整。下端部手斧痕。							S A3, A-224
	20		612×190×80		刃により割断。四面を手斧で調整。下端部手斧痕。							S A3, A-279
	21		325×120×60		新目材。刃により割断。四面を手斧で調整。下端部手斧痕。							S A3, A-249
	22		307×119×67		新目材。刃により割断。四面を手斧で調整。下端部手斧痕。							S A3, A-264

(2) 土壙内出土遺物 (第19~23図、図版17~19)

調査で確認された土壙はA区で37基、B区21基、計画排水路区で27基の計85基を数える。各土壙からは土師器、須恵器、黒色土器、内黒土器、赤焼土器、土製品が出土した。出土遺物の内訳では、土師器18片、須恵器593片、黒色土器3片、内黒土器126片、赤焼土器1860片、土製品4点で、総数2604点の出土である。ここでは土壙内出土遺物のなかで、各土壙が営まれた時期を示す土器を測図し、第19~23図に示した。なかでもA区のSK156、149、203の各土壙からは、一括した状態で完形またはそれに近い形で出土し、時期や性格等を決定する好資料として検出している。器種別にその特徴を明示し、各土壙の時期を推測する。土師器はSK156土壙出土の1点(23)のみである。斐形土器底部で器外面に縦方向のハケ目、内面に斜方向のハケ目により器面調整が施されている。底面は砂底となる。須恵器は蓋(24~27)、壠(36~58)、壺(59)、横瓶(60)、甕(61・62・66~68)、壺(63~65)が出土している。24~26はSK156土壙より出土した。天井部をヘラ切り離し後、鉢部を付けている。鉢部は、上部を平坦としているが中心部がやや尖る。25は、宝珠形の鉢部片である。外面全面に自然釉が付着している。26は径178m/mを測る大型の蓋である。天井部をヘラ切り離し後偏平な鉢部を付している。24、26は器内外面共に布ナデによる整形が施されている。口縁部は屈折するが、接地面まで重下する24と、やや内傾する26である。27はSK



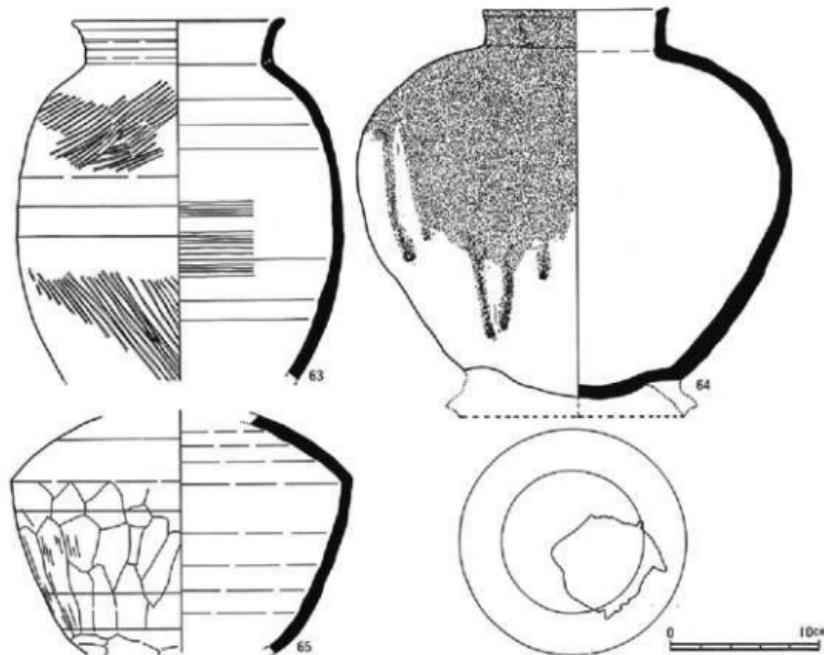
第19図 土壙内出土遺物(1)



第20図 土壌内出土遺物(2)

488土壌より出土した。鉢部内が全体にくぼみ、鉢端部が外に開く形状を示すもので、天井部は切り離し面に回転ヘラ削りの再調整が施される。内面に墨痕が付着しており、硯として転用されたものと考えられる。28~35は内面をヘラミガキ後、黒色化処理された内黒土器である。形状で高台が付かないもの(28・31・33~35)と付高台となるもの(29・30・32)とに分けられる。前者は、比較的身が深く、口縁部で心もち内傾する。後者は底部から口縁部にかけて直線的に広がる形状を呈している。底部の切り離しはすべて回転糸切り離しである。時期は10世紀代が当たられる。坏形土器は須恵器(37~58)と赤焼土器(69~89)が出土した。須恵器坏はその形状により平底となるもの(A類)と高台が付くもの(B類)とに区別され、更に形態で細分出来る。

A類 底部を回転ヘラ切り手法で切り離され、ナデ等の再調整が認められず、形態的に二つに細分される。A-1類は底部がやや丸味をもつもの(38~41)、平坦となるもの(37・42~48)である。前者は身が深く、法量が多い。後者は口径に比して底径が大きく、身も浅くやや皿状となる。底部には「凡」と読み取れる墨書銘が書かれているものと(43・47・48)、「千」と書かれた45がある。A-2類は底部の切り離しがすべて回転糸切り離し手法である。法量と口縁部の形態から2分される。小さな底径からやや内傾しながら外反し、口縁部で直線的に外傾するもの(50・53・54)で、50は身が深い。49・51・52は、小さな底部か



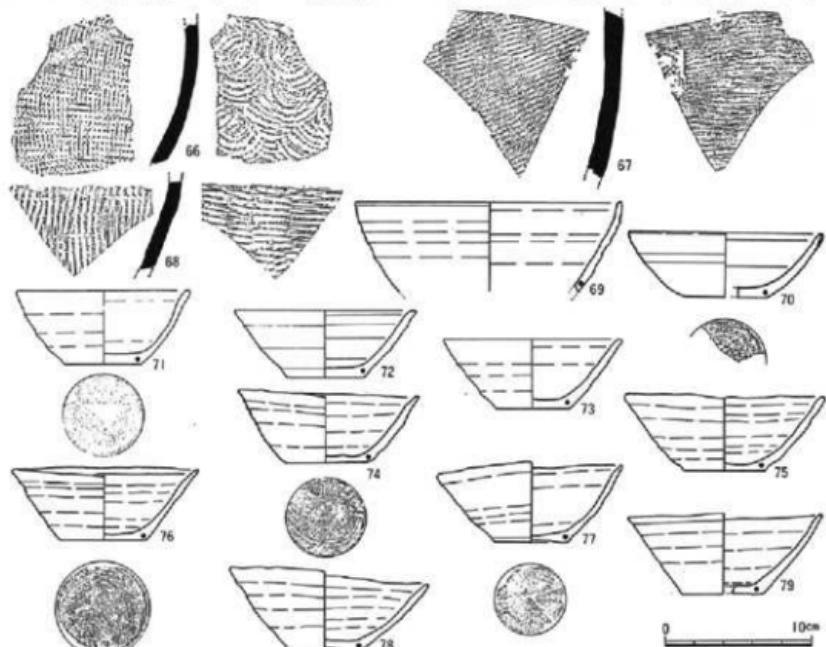
第21図 土壌内出土遺物(3)

表5 土壌内出土遺物観察表 (1)

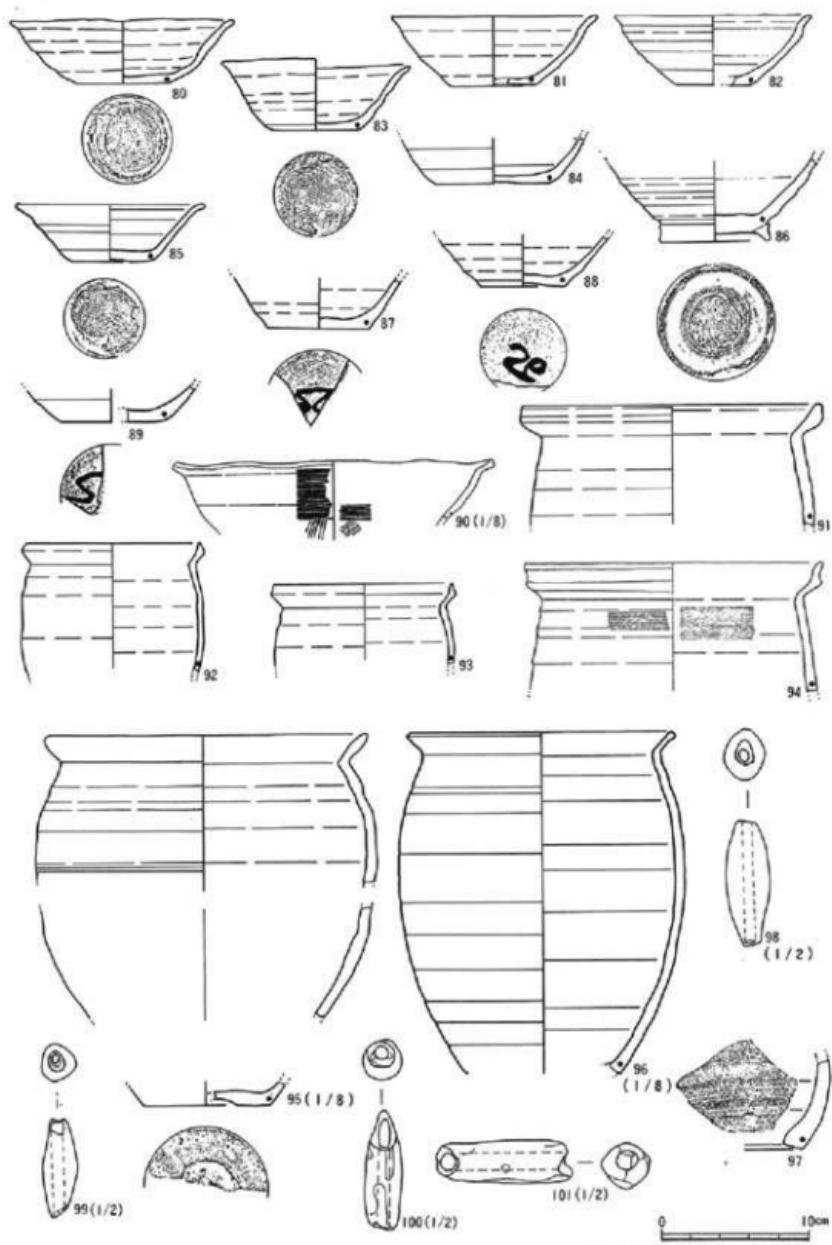
排 固	遺物 番号	器 種	計測値 (m/m)			色 調	胎 土	焼成	底部切離	調整技法・備 考	出土地点 層 位
			口径	底深	器高						
第 19	23	土師器 甕	78			Hue 10YR 8/2 灰白	粗砂混	良	砂塊	ハケ目	S K-156-F2
	24	須恵器 蓋(縁部)	(140)	30		Hue 5 BG 6/1 青灰	緻密	堅		クロ瓶 天井部へラ切り	S K-156-F2
	25					Hue N 5 灰	緻密	堅		灰被り	S K-156
	26		(178)	38		Hue 5 YR 8/4 灰 灰	細砂混	堅		クロ瓶 天井部へラ切り	S K-156-F3
	27					Hue 7.5Y 5/1 灰	緻密	堅		クロ瓶	S K-488-F
	28	内風土器 环	(184)	(70)		Hue 10YR 8/1 灰白	粗砂混	良	回転糸切	クロ瓶 内面に剥き	S K-224-F
第 20	29	内風土器 高台付环	(145)	(76)	56	Hue 5 YR 8/3 灰 灰	細砂混	良	回転糸切	クロ瓶 内面に剥き	S K-203-F1
	30	内風土器 (未完成) 高台付环		66		Hue 5 YR 8/4 灰 灰	細砂混	良	回転糸切	クロ瓶	S K-41-F1
	31	内風土器 环	(139)	53	54	Hue 5 YR 8/3 灰 灰	粗砂混	良	回転糸切	クロ瓶 ハケ目	S K-77-F1 RP-63
	32		(71)	(35)		Hue 7.5YR 6/3 にじい縁	粗砂混	良	回転糸切	クロ瓶	S K-203-F2
	33		(185)			Hue 7.5YR 8/2 灰白	粗砂混	良	回転糸切	クロ瓶	S K-224-F
	34			49		Hue 2.5YR 7/4 淡赤棕	粗砂混	良	回転糸切	クロ瓶 内面に少しおの	S K-203-F2
	35		(132)	(60)	(46)	Hue 10YR 8/3 淡黄棕	緻密	良	回転糸切	クロ瓶	S K-488-F
	36	須恵器 环	(60)	(25)		Hue 10YR 8/3 淡黄棕	緻密	良	ハラ切	クロ瓶	S K-41-F1
	37		(133)	(73)	28	Hue 10Y 7/1 灰白	粗砂混	良	ハラ切	クロ瓶	S K-274-F2
	38		(146)	(84)	(43)	Hue 7.5Y 8/2 灰白	緻密	堅	回転へラ切	クロ瓶 内外面に保有り	92-78-III
第 21	39	須恵器 环	(1)	(71)	(42)	Hue 10YR 8/3 淡黄棕	粗砂混	良	ハラ切	クロ瓶 内外面に保有り	S K-156-R RP-38
	40		(137)	74	40	Hue 7.5Y 8/1 灰白	緻密	堅	ハラ切	クロ瓶	S K-223-F
	41		132	62	40	Hue 7.5Y 8/1 灰白	緻密	良	ハラ切	クロ瓶	S K-156-F1
	42		(84)	(17)		Hue 5 Y 8/1 灰白	緻密	堅	ハラ切	クロ瓶	S K-156-F1
	43		(80)	(17)		Hue 7.5Y 7/1 灰白	緻密	堅	回転へラ切	クロ瓶 墨書き有り、墨書き不明	S K-510-F
	44		150		35	Hue 7.5Y 8/1 灰白	細砂混	良	ハラ切	クロ瓶	S K-156-F1
	45		(80)			Hue 5 B 6/1 青灰	緻密	堅	ハラ切	クロ瓶 墨書き有り、墨書き不明	S K-523-F1
	46		(142)	(98)	(38)	Hue 10Y 8/1 灰白	緻密	堅	回転へラ切	クロ瓶	S K-264-Y
	47		133	78	28	Hue 10Y 7/1 灰白	緻密	堅	ハラ切	クロ瓶 墨書き有り、墨書き不明	S K-264-Y
	48					Hue 7.5YR 7/6 縁	細砂混	堅	ハラ切	クロ瓶 墨書き有り、墨書き不明	S K-274-F3
	49		(127)	(58)	(39)	Hue 2.5GY 7/1 明ガリーブ灰	緻密	堅	回転糸切	クロ瓶	S K-63-F
	50		(124)	(69)	(44)	Hue 10Y 7/1 灰白	緻密	堅	回転糸切	クロ瓶	S K-156-Y RP-56
	51		126	56	36	Hue 10BG 7/1 明青灰	緻密	良	回転糸切	クロ瓶	S K-156-R RP-41
	52		133	55	42	Hue 10Y 7/1 灰白	緻密	良	回転糸切	クロ瓶	S K-156-F1
	53		125	60	37	Hue 5 Y 7/1 灰白	緻密	良	回転糸切	クロ瓶 粘用混	S K-156-F1
	54			55		Hue 7.5YR 8/0 淡黄棕	粗砂混	堅	ハラ切	クロ瓶	S K-24-F1
	55	高台付环	128	72	79	Hue 5 PB 5/1 青灰	緻密	堅	回転へラ切	クロ瓶 重ね焼有り	S K-156-Y RP-52
	56	高台付环	103	64	40	Hue N 4 灰	緻密	良	回転へラ切	クロ瓶	S K-156-F
	57	高台付环	108	7	45	Hue N 3 暗灰	緻密	堅	ハラ切	クロ瓶 灰被り	S K-156-F
	58	高台付环		(70)		Hue 10Y 7/1 灰白	緻密	堅	ハラ切	クロ瓶 底部に×印のハラ切	S K-156-F2
	59	甕		(66)		Hue 10Y 7/1 灰白	緻密	堅		クロ瓶	S K-156-F
	60	横 瓶				Hue N 4 灰	緻密	堅		タクタ クロ瓶	S K-156-Y RP-53
	61	甕				Hue 5 B 6/1 青灰	緻密	堅		タクタ 格子目状 茶緑斑	S K-263-F1
	62	甕				Hue 7.5Y 8/1 灰	緻密	堅		タクタ 茶緑灰・灰被り アテ灰、青苔斑	S K-55-F3

ら直線的に外傾して開く口縁をもち、身がやや深い。体部に明瞭なロクロ痕を残す。

B類 底部の切り離しが回転ヘラ切り離し手法(B-1類)と回転糸切り離し手法(B-2類)とに分けられる。B-1類は、底部から口縁にかけてやや丸味をもちらながら立ち上がり、身が深いもの(55・58)と、身が浅いもの(57)がある。55には焼成時の重ね焼きによる繩カケ痕が器面に残っている(図版-55)。本類の土器は歪つな形態となる。58には底部外面にヘラ書きによる「X」印が描かれている。B-2類は底部から直線的に急激に広がり、口唇部でやや丸味をもつ(56)。器肉はやや厚く、器面に布ナデによる調整が施される。壺は主にして口縁部の形態から長頸壺・短頸壺・肩衝壺・小壺の器種が認められる。第20図59は小壺である。長頸をもつものと考えられるが破片資料である。頸部から接合する体部上端部は直線的で肩が張る形状を呈している。63は長胴を呈した肩衝壺である。口唇部が急激に外反する。64は大型の短頸壺である。直線的に立ち上がった口縁が端部でやや外反する。体部上半からゆるやかに内寄し底部の高台部に下がる。高台部は欠損している。65は、長頸壺の体部である。頸部から体部上半部へ直線的に傾斜し、肩部で急激に内傾しながら底部となる。底部は欠落しているが、高台が付くものと考えられる。体部の肩部下半には器面にヘラケズリによる調整が施され、ロクロによる布ナデ痕を残す。肩部上半ではロクロ整形が施され、わずかに自然釉がかかる。60は横瓶の閉栓部である。外面に条線



第22図 土壙内出土遺物(4)



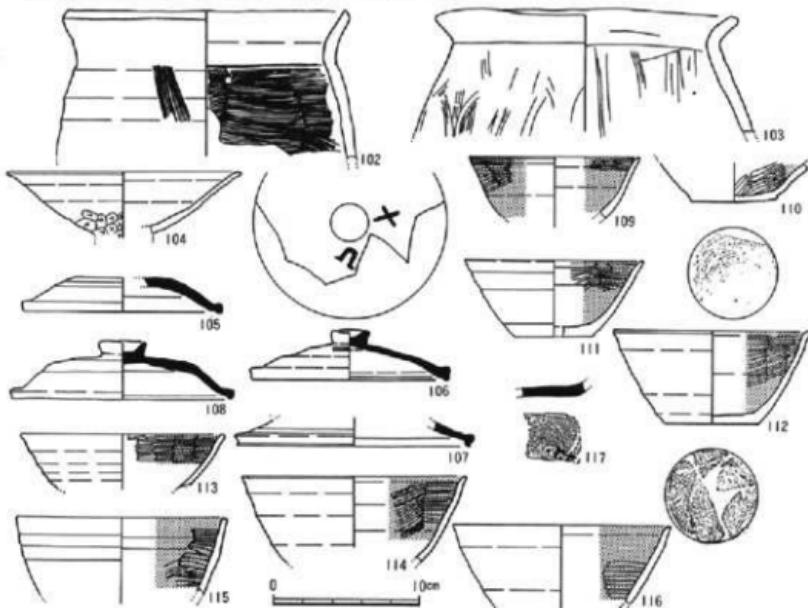
第23図 土壌内出土遺物

表6 土壌内出土遺物観察表 (2)

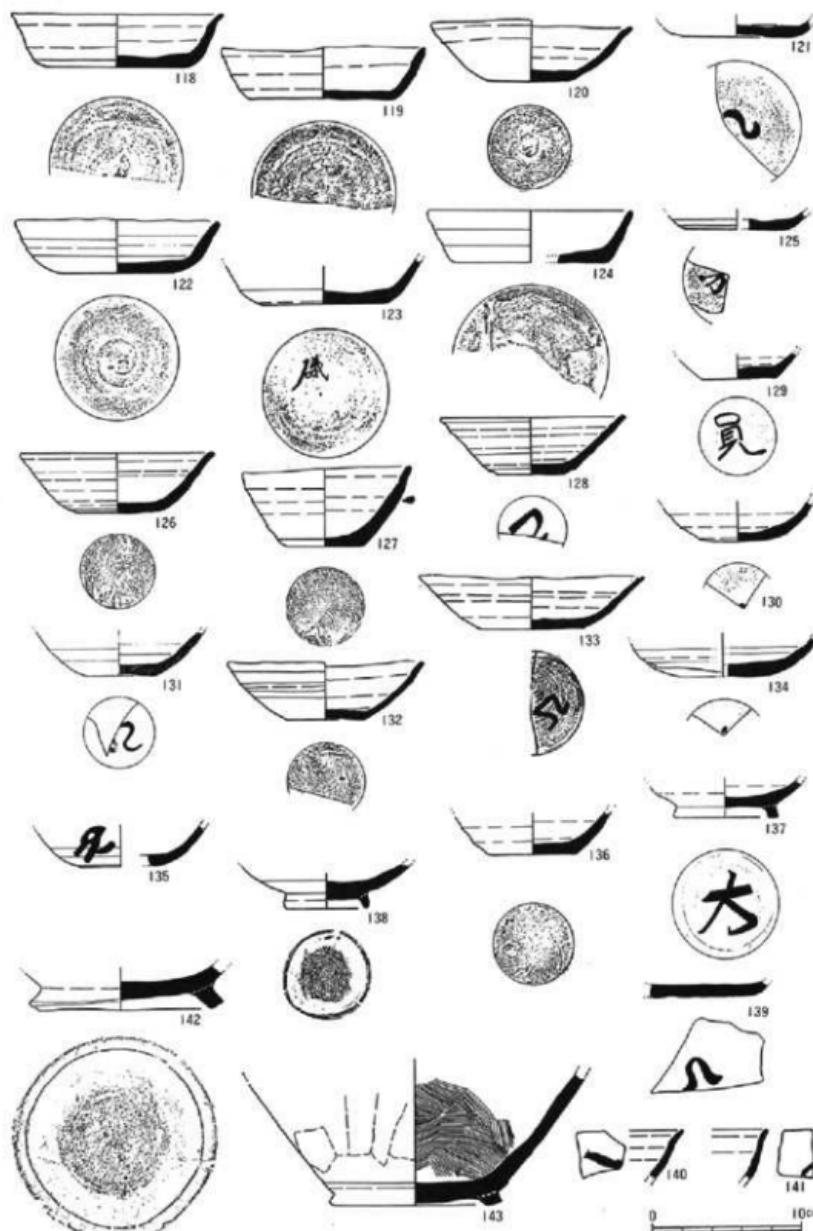
排 組	遺物 番号	器 種	計測値 (m/m)		色	調	胎土	焼成	底面切離	調整技法	備考	出土地点 層位	
			口径	底径									
第 21	63	須恵器	環	(140)	(23)	Hue 5 PB 5/1 青灰	緻密	堅		ロクロ痕・タキハ・ハケ目 灰被り・風化を及ぼしている	SK 156 RP 42		
	64		環	(130)	(140)	(26)	Hue 5 G 3/1 地縫灰	緻密	堅	高台付	ロクロ痕・自然糊	SK 156	
	65		壺		(180)	Hue N 5 灰色	緻密	堅		ロクロ痕・ハラ削り	SK 156		
第 22	66	須恵器	壺			Hue N 4 灰	緻密	堅		タクナ・梅子目状 アラ底・青海波	SK 203 F1		
	67		壺			Hue 7.5YR 5/1 灰	緻密	堅		タクナ・梅子目状 アラ底・朱縫灰	SK 203 F1		
	68		壺			Hue 5 PB 5/1 青灰	緻密	堅		タクナ・梅子目状 アラ底・朱縫灰	SK 188 F2		
第 23	69	赤燒土器	环	(170)	(61)	Hue 7.5YR 8/3 灰被り	粗砂混	良		ロクロ痕・外延焼	SK 24 F1		
	70		环	(120)	(56)	(45)	Hue 10YR 8/3 灰被り	粗砂混	良	ハラ切	ロクロ痕	SK 63 F1	
	71		环	(110)	(55)	(50)	Hue 7.5YR 7/6 灰	粗砂混	良	回転糸切	ロクロ痕	SK 242 F1	
	72		环	(120)	54	(45)	Hue 10YR 7/3 に青い縫	粗砂混	良	回転糸切	ロクロ痕	SK 242 F1	
	73		环	(122)	52	(46)	Hue 7.5YR 7/4 に青い縫	粗砂混	良	回転糸切	ロクロ痕	SK 243 F1	
	74		环	124	57	45	Hue 5 YR 8/4 洪	粗砂混	良	回転糸切	ロクロ痕	SK 149 F4	
	75		环	135	54	51	Hue 7.5YR 8/3 洪被り	粗砂混	良	回転糸切	ロクロ痕	SK 243 F1	
	76		环	123	60	48	Hue 7.5YR 7/6 洪	粗砂混	良	回転糸切	ロクロ痕	SK 149 F4	
	77		环	(120)	50	(55)	Hue 5 YR 7/6 洪	粗砂混	良	回転糸切	ロクロ痕	SK 22 F1	
	78		环	135	48	52	Hue 5 YR 7/6 洪	粗砂混	良	回転糸切	ロクロ痕	SK 33 F1	
	79		环	(130)	57	(56)	Hue 7.5YR 8/3 洪被り	粗砂混	良	回転糸切	ロクロ痕	SK 156 F1	
第 24	80	赤燒土器	环	(150)	(75)	(44)	Hue 10YR 8/1 洪	粗砂混	良	回転糸切	ロクロ痕	SK 203 F1	
	81		环	118	(60)	47	Hue 7.5YR 8/4 洪被り	粗砂混	良	回転糸切	ロクロ痕	SK 200 F1	
	82		环	(130)	(50)	(47)	Hue 10YR 8/3 洪被り	粗砂混	良	回転糸切	ロクロ痕	SK 240 F1	
	83		环	(120)	56	49	Hue 7.5YR 8/1 洪被り	粗砂混	良	回転糸切	ロクロ痕	SK 149 F1	
	84		环		76		Hue 7.5YR 7/3 に青い縫	粗砂混	良	回転ヘラ切	ロクロ痕	SK 523 F1	
	85		环	(120)	54	38	Hue 7.5YR 7/4 に青い縫	粗砂混	良	回転糸切	ロクロ痕	SK 203 F1	
	86		高台付环		76	(52)	Hue 7.5YR 6/8 洪	粗砂混	良	回転糸切	ロクロ痕・内面焼	SK 203 F1	
	87		环		70		Hue 7.5YR 7/3 に青い縫	粗砂混	良	回転糸切	ロクロ痕・内面焼 墨書き有り・墨書き不明	SK 476 F1	
	88		环		(60)		Hue 7.5YR 7/6 洪	粗砂混	良	回転糸切	ロクロ痕 墨書き有り・墨書き不明	SK 476 F1	
	89		环		(69)		Hue 7.5YR 8/3 洪被り	粗砂混	良	回転糸切	ロクロ痕 墨書き有り・墨書き不明	SK 276 F1	
第 25	90	赤燒土器	壺	(420)		(105)	Hue 7.5YR 8/3 洪被り	粗砂混	良		タクナ・アラ底・ハケ目	SK 83 F2	
	91		壺	(200)			Hue 5 YR 7/6 洪	粗砂混	堅		ロクロ痕	SK 243 F1	
	92		壺	(110)		(89)	Hue 2.5YR 8/2 洪	粗砂混	良		ロクロ痕	SK 156 F1	
	93		壺	(122)		(52)	Hue 7.5YR 7/3 に青い縫	粗砂混	良		ロクロ痕・煤	SK 63 F1	
	94		壺	(204)		(87)	Hue 2.5YR 7/6 洪被り	粗砂混	良		ハケ目	SK 244 F2	
	95		壺	(115)	(84)		Hue 2.5YR 7/4 洪被り	粗砂混	良	ヘラ削り	ロクロ痕・ヘラ削り	SK 149 F1	
	96		壺	(180)	(102)	231	Hue 5 YR 7/4 に青い縫	粗砂混	良	ヘラ切	ロクロ痕	SK 156 F1	
	97		壺				Hue 7.5YR 7/6 洪	粗砂混	良		ロクロ痕	SK 22 F1	
	98	土製品	土錐				Hue 10YR 6/1 褐					SK 156 RP 54	
	99		土錐				Hue 10YR 7/2 に青い縫					SK 149 F	
	100		土錐				Hue 10YR 7/2 に青い縫					SK 41	
	101		土錐				Hue 7.5YR 7/1 明褐色					SK 155 F1	

状の叩き痕を残し、内面には整形時による粘度巻き上げ痕を残す。壺はいわゆる大甕類の破片資料である。ここでは叩き痕や、アテ痕で特異な資料を載せた。外面が格子目状叩きを施すもの(61・66・67)と、平行条線状叩きを施すもの(62・68)との区分される。前者のアテ痕は放射状アテ(61)、同心円アテ(66)、平行条線アテ(67)である。外面の叩き痕は深い痕跡を残している。後者のアテ痕は青海波アテ(62)、平行条線アテ(68)である。62の外面には自然釉が施されている。赤焼土器には壺、甕、壠の器種がある。壺類が多いが、遺構内では甕・壠と同一に出土している。壺と甕は、法量や、形態および製作技法の違いから分類される。壺では底部の切り離し手法や形態、口縁部の形状で4つに分け、(A-1～A-4)、更に区分した。A-1・2類は底部の切り離しが回転ヘラ切りを施こし、やや肉厚となる(69・70・75・84)。A-3類は底径に比して口径が1:2前後になり、底部の切り離しを回転糸切り手法を施こし、底部から口縁にかけて直線的に広がり、口唇部で大きく外反するもの(85)。同様にやや丸味をもちらながら口縁部へつづき、口唇部で外反するもの(73・82)。口唇部がやや丸味をもちらながら大きく外反するもの(74・76・77・79・81・83)である。74・76・77は、A地区SK149土壤より一括して出土した土器である。A-4類(71・72・78)は口径に対して底径が1:4と小さく口唇部がやや直線的に開くものである。その他では水瓶の注口部(101)と、土鐘(98～100)が出土している。

### (3)溝状遺構出土遺物 (第24～28図、図版20～23)

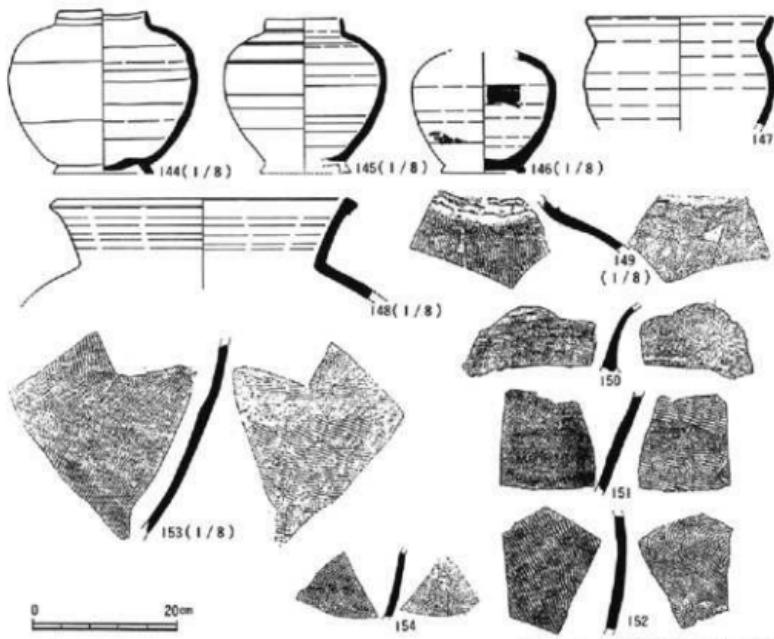


第24図 溝状遺構出土土器(1)



第25図 溝状造構出土土器(2)

調査で検出された溝状遺構は141条を数える。A区で14条、B区で105条、計画排水路区内で22条である。各区で検出された遺構内からは量の多少を問ず遺物が出土している。その内訳は土師器15片、須恵器1530片、黒色土器22片、内黒土器630片、赤焼土器5061片で、その他では、砥石、土鉢、フイゴの羽口、精塙土器片、基石と思われる径7mmの偏平な石製品が出土している。土器片での総数は7258片の出土量である。ここでは各調査区で確認されている溝状遺構出土遺物のなかで、各溝状遺構が営まれた時期や性格を示す土器を測図し、第25～28図に示した。なかでもA区のS D43、91、B区 S D262、265、計画排水路 S D206溝状遺構内からは、一括して廃棄されたものと考えられる土器が出土し、本遺構の性格・内容を考える上で貴重な資料を得た。以下は、出土遺物を種別や器種毎に配列し、遺構との係わりを述べる。土師器（第25図102～104）は、A区 S D62(102)、151(103)、B区 S D265(104)より出土した。102・103は甕である。器内外面に器面調整によるハケ目が施されており、102の内面では、幅6～12mm、長さ5～7cmに丁寧な調整が施されている。103は、高台を付す皿か高环の坏部と考えられる器形である。器下半にはヘラ削りによる器面整形痕を、上半部にはロクロによる回転痕を残している。時期は102・103共に8世紀末頃に推測される。104は9世紀初頭と考えられる。109は黒色土器である。内外面共に

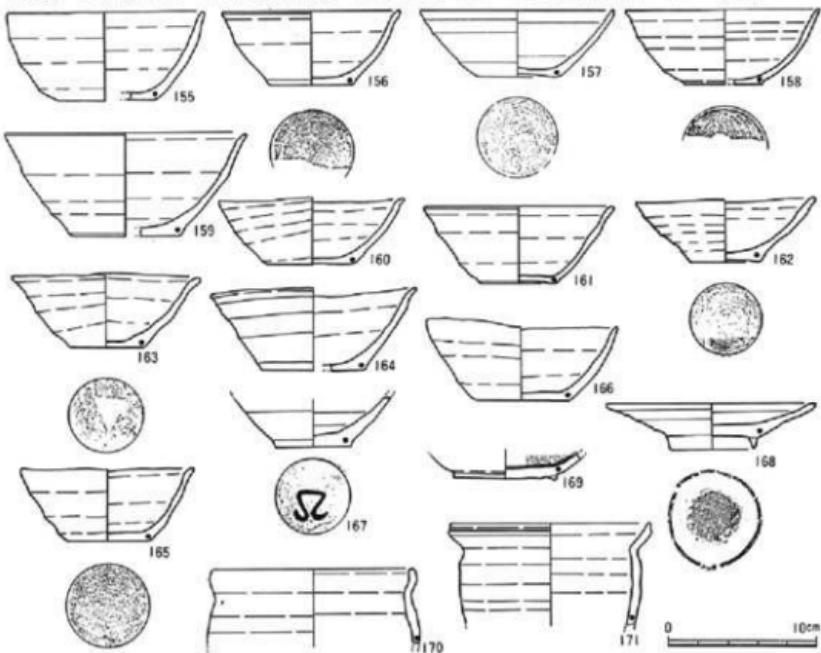


第26図 溝状遺構出土土器(3)

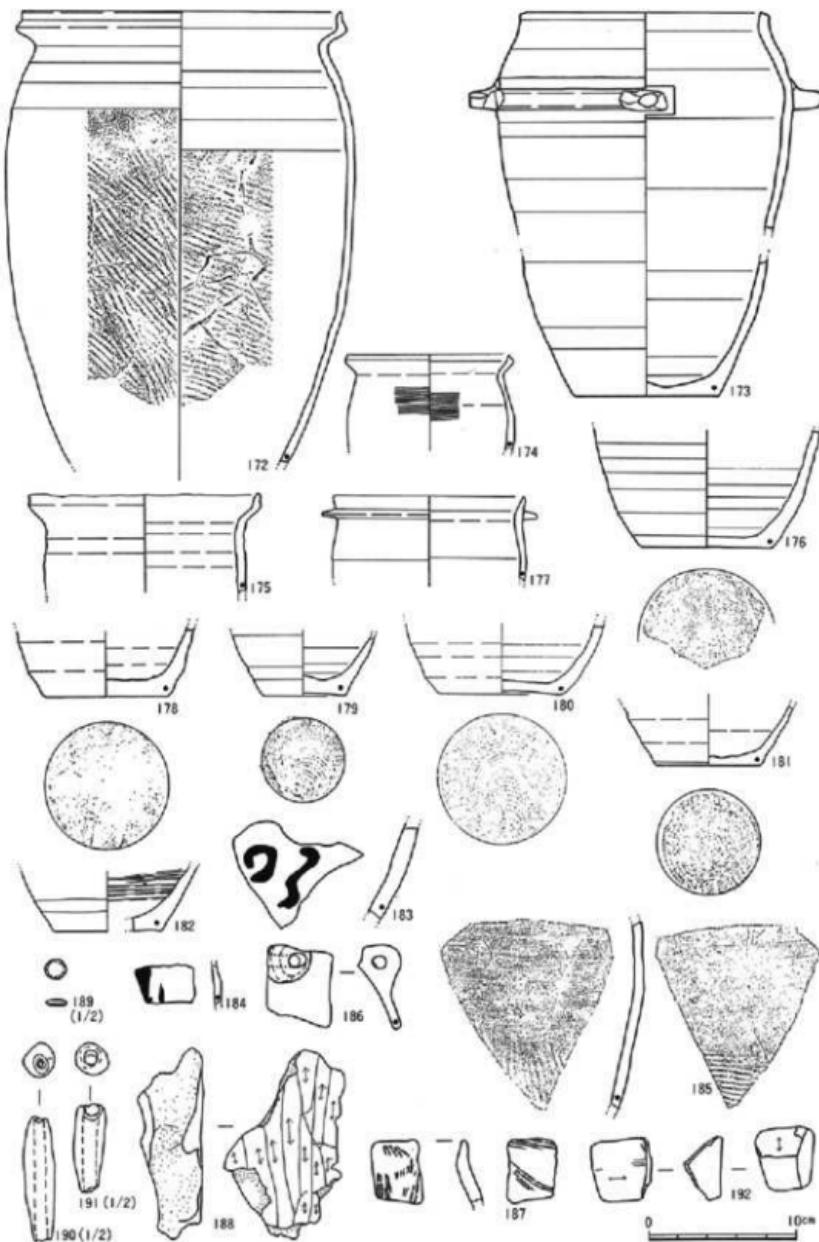
表7 溝状遺構出土遺物観察表 (1)

辨 別 番号	遺物 番号	器 種	計測値 (m/m)		色	調	胎	焼成	底部切離	調整技法・備考	出土地点 層位
			口径	底径							
部 102		甕 (190)	(99)	Hue 7.5YR 8/2 灰 白	細砂混	良			ハケ目 内外面に埋	S D- 62-F1	
	103	土 器 器	甕 (218)		Hue 7.5YR 7/6 他	細砂混	良			ハケ目	S D-151-F1
	104		甕 (81)	(44)	Hue 2.5Y 7/3 灰 黄	細砂混	堅	割り	ロクロ痕	S D-265	
	105	眞 惠 瓶	甕 (139)	(24)	Hue N 7 灰 白	緻 密	堅		ロクロ痕 火口痕、ハラ割り	S D- 43-F3 R P 61	
	106		甕 (113)	(34)	Hue 5 Y 8/3 灰 黄	粗砂混	良		ロクロ痕、ハラ日 外側に墨有り、墨垂れ不明	S D-532-F	
	107		甕 (160)	(18)	Hue 5 Y 8/3 灰 黄	緻 密	堅		ロクロ痕 転用痕	S D-490-F	
	108		甕 (159)	40	Hue 2.5YR 4/1 灰 灰	緻 密	堅		ロクロ痕	S D- 84-F1	
	109		黑色土器		Hue G 1.7/1 灰 黑	緻 密	堅		ロクロ痕・磨き	S D-438-F1	
	110		环 (60)		Hue 10YR 5/3 灰 黑	細砂混	良	回転糸切	内面に削り	S D-276-F1	
	111		环 (122)	(52)	S2 Hue 7.5YR 8/2 灰 白	細砂混	良	回転糸切	ハケ目痕、ハケ目	S D-269-F1	
	112		环 (136)	(64)	Hue 10YR 8/2 灰 白	粗砂混	良	回転糸切	ロクロ痕 内面に削り	S D-262-Y	
	113		环		(41)	Hue 10YR 8/2 灰 白	細砂混	良	ロクロ痕 内面に削り	S D-265-Y	
	114		环 (138)	(58)	Hue 10YR 7/4 灰 黑	粗砂混	良		ロクロ痕、ハラ切	S D-267-F1	
四 115		内黑土器	环 (165)	(53)	Hue 7.5YR 7/4 灰 黑	細砂混	良		内面に削り	S D- 91	
	116		环 (152)		Hue 7.5YR 8/3 灰 黑	細砂混	良		ロクロ痕 内面に磨き	S D-276-F2	
	117		環 案 89		Hue 2.5GY 7/1 明オリーブ灰	粗砂混	堅	回転糸切	墨垂れ有り、墨垂れ不明	S D-507-F	
	118		环 (149)	45	S5 Hue 2.5GY 7/1 明オリーブ灰	緻 密	堅	回転ヘラ切	ロクロ痕	S D-210-F1	
	119		环 (136)		(33)	Hue 10YR 8/1 灰 白	緻 密	堅	ハラ切	ハケ目 内外面に埋	S D-206-F1
	120		环 (137)	58	41	Hue 7.5Y 7/2 灰 白	緻 密	堅	回転ヘラ切	ロクロ痕	S D-490-F
	121		环		90	Hue 10Y 8/1 灰 白	緻 密	堅	ロクロ痕 墨垂れ有り、墨垂れ不明	S D-278-F1	
	122		环 (139)	(86)	36	Hue 10Y 7/1 灰 白	細砂混	堅	ロクロ痕 墨垂れ有り、墨垂れ不明	S D-277-Y	
	123		环 (85)	(27)	Hue 2.5GY 7/1 明オリーブ灰	粗砂混	良	ヘラ切	ロクロ痕 墨垂れ有り、墨垂れ不明	S D-278-F2	
	124		环 (105)	(37)	Hue 7.5YR 8/3 灰 黑	緻 密	堅		ロクロ痕	S D-206-F1	
第五 125		須 慈 器	环 (34)		Hue 10Y 8/1 灰 白	緻 密	堅	ヘラ切	ロクロ痕 墨垂れ有り、墨垂れ万古	S D-520	
	126		环 (133)	51	43	Hue 10GY 7/1 明灰	細砂混	堅	回転糸切	ロクロ痕	S D-262-Y
	127		环 (114)	(52)	(55)	Hue 2.5Y 8/1 灰 白	粗砂混	堅	回転糸切	ハケ目 内外面に埋	S D- 91 R P 33
	128		环 (130)	(46)	(39)	Hue 2.5Y 5/1 灰 白	緻 密	堅	回転糸切	ロクロ痕 墨垂れ有り、墨垂れ不明	S D-263-Y
	129		环		52	Hue 10YR 8/3 灰 黑	粗砂混	良	回転糸切	ロクロ痕 墨垂れ有り、墨垂れ「真」	S D-278-F2
	130		环 (60)	(26)	Hue 2.5Y 8/3 灰 白	緻 密	堅	回転糸切	ロクロ痕 墨垂れ有り、墨垂れ不明	S D-515	
	131		环		47	(29)	Hue 2.5Y 8/1 灰 白	緻 密	回転糸切	ロクロ痕 墨垂れ有り、墨垂れ不明	S D-265-F1
	132		环 (130)	(53)	(38)	Hue 7.5Y 6/1 灰 白	緻 密	回転糸切	ロクロ痕	S D- 91 R P 67	
	133		环 (154)	35	35	Hue 10Y 8/1 灰 白	緻 密	回転糸切	ロクロ痕 墨垂れ有り、墨垂れ不明	S D-490-F	
	134		环 (52)	(20)	Hue 2.5GY 6/1 オリーブ灰	緻 密	堅	ヘラ切	ロクロ痕 墨垂れ有り、墨垂れ不明	S D-439-F1	
第六 135		高 台付 环	环 (56)	(26)	Hue N 6 灰 白	緻 密	堅	回転糸切	ロクロ痕 胎内に墨垂れ有り、墨垂れ不明	S D-441-F1	
	136		环		56	Hue 10YR 7/3 灰 黑	細砂混	堅	回転糸切	ロクロ痕 胎内に墨垂れ有り	S D-262-Y
	137		高 台付 环		(73)	Hue 5 Y 8/3 灰 黄	緻 密	堅	回転糸切	ロクロ痕 墨垂れ有り、墨垂れ「方」	S D-527-F
	138		高 台付 环		(58)	Hue N 6 灰 白	緻 密	堅	回転糸切	ロクロ痕	S D- 91 R P 66
	139		环			Hue 10Y 7/1 灰 白	緻 密	堅	ヘラ切	内面、胎内 墨垂れ有り、墨垂れ不明	S D-278-F
	140		环			Hue 5 Y 6/1 灰 白	緻 密			ロクロ痕 胎内に墨垂れ有り、墨垂れ不明	S D-278-F1
	141		环			Hue 2.5GY 6/1 オリーブ灰	緻 密			ロクロ痕 内面に墨垂れ有り、墨垂れ不明	S D-278-F1
	142		甕 (116)		Hue N 6 灰 白	緻 密	堅	ヘラ切	ロクロ痕、内面にハテ形 内面、反対?	S D-206-F3	
	143		壺 (116)	(88)	Hue N 7 灰 白	細砂混	堅	回転ヘラ切	ロクロ痕、内面にハテ形 内面、反対?	S D-278-Y	

ヘラ磨きのうち黒色化処理が施されている。110—116は内面を黒色化処理した内黒土器である。器内面をヘラ磨き後黒色化処理が施されている。105～108は須恵器蓋である。天井部がヘラ削りにより平坦となり、中央部が窪む鉢部が付けられている(106・108)。口縁部が若干内側に折れ曲る105・106・108と、端部でやや外側へ返る107がある。117～141は須恵器壺である。底部の切り離しや形態から3つに分け、(A—1～3種)更に区分した。A—1類は底部の切り離しが回転ヘラ切り技法によるもの(118～125、134、139)、A—2類は底部の切り離しが回転糸切り離し技法によるもの(126～133、135、136)、A—3類は回転糸切り後高台が付するもの(137・138)とに分けられる。A—1類は、底径に比し、口径の差が少ない比率を呈するものと大きいものがあり、比率が大きい器形のものは、底部がやや丸味をもつ。A—2類は、口径と底径との比率が2:1前後を呈し、器高が高い127をのぞけば、偏平な形状を呈している。A—3類は高台端部が台形を呈するもの(137)と舌状になる(138)に分けられる。これらの壺の体部や底部には、「×」、「磯」、「万」、「員」、「大」の他、凡を意味する「匁」が墨書きされている。106の須恵器蓋はB地区 S D532溝状遺構より出土し、凡と×又は十の数字が墨書きされている。又123は底部に「磯」の墨書きがあり、祓いの文字である。142～152は須恵器蓋・壺である。142・143は底部資料であるが底部とヘラ



第27図 溝状遺構出土土器(4)

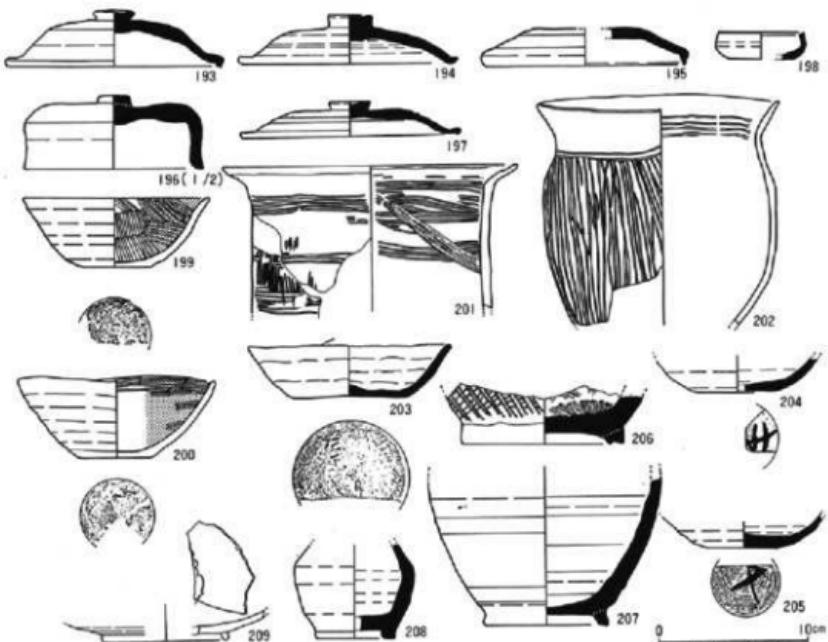


第28図 溝状造構出土遺物

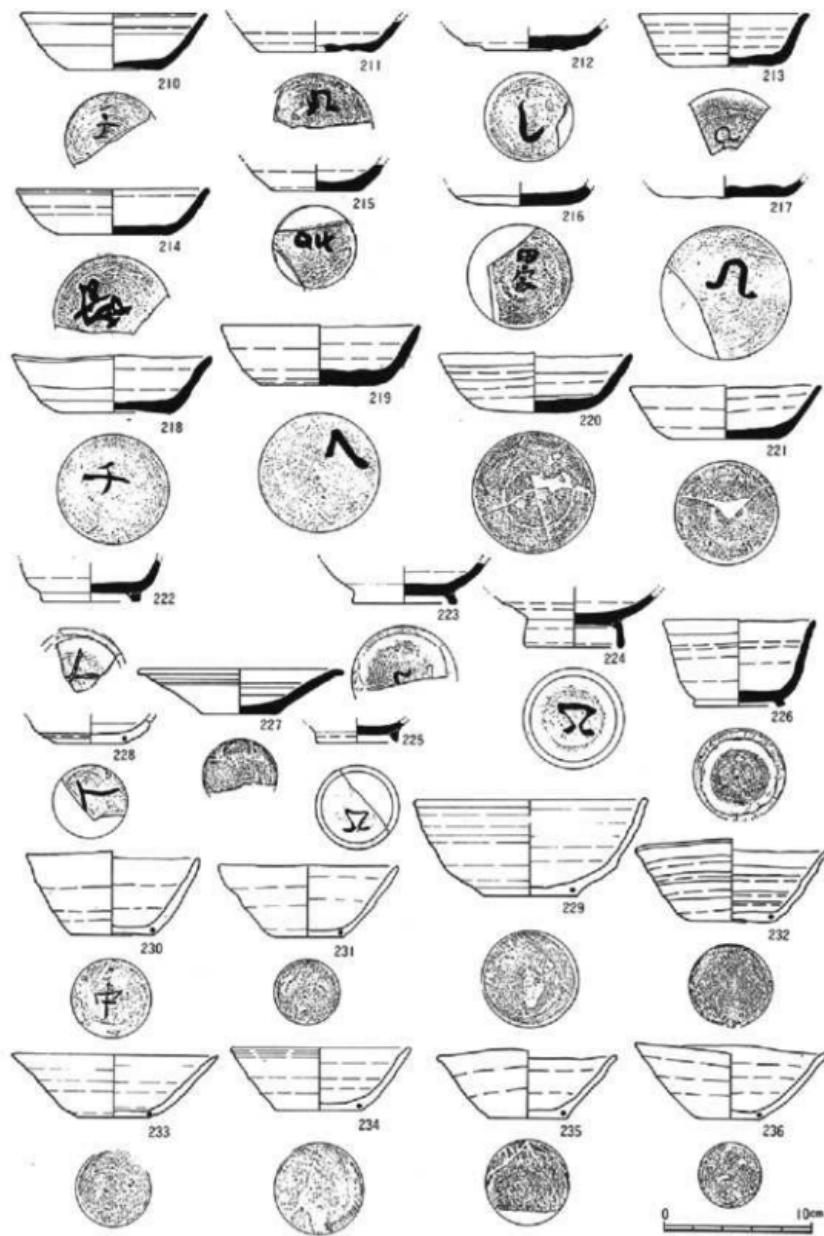
表8 溝状遺構出土遺物観察表(2)

井	遺物番号	器種	計測値(m/m)			色調	胎土	焼成	底部切離	調整技術・備考	出土地点層位
			口径	底径	高さ						
第26井	144	壺	(110)	140	228	Hue N 6 灰	緻密	堅	回転ヘラ切	ロクロ痕 焼付化粧見出し無	SD 265 F1
	145	壺				Hue N 7 白	緻密	堅		ロクロ痕	SD 265 F1
	146	壺	(110)	(170)	Hue N 6 灰	緻密	堅	ヘラ切離 安て開離	ロクロ痕・タクキ	SD 265 F1	
	147	甕	133	(76)	Hue 5PB 6/1 青灰	緻密	堅		ロクロ痕	SD 265 F1	
	148	壺	214		Hue 5B 4/1 青灰	緻密	良		ロクロ痕	SD 439 F1	
	149	壺			Hue 7.5YR 5/2 灰	緻密	堅		タクキ・表面剥 アラ接・芯内	SD 262 F1	
	150	甕			Hue 7.5YR 5/2 灰	緻密	堅		ハケ目調整	SD 262 F1	
	151	壺			Hue 10YR 4/1 青灰	緻密	堅			SD 439 Y	
	152	甕			Hue 5Y 4/1 青灰	緻密	堅		タクキ・表面剥 アラ接・芯内	SD 441 F1	
	153	壺			Hue 7.5YR 5/1 灰	緻密	堅		タクキ・表面剥 アラ接・芯内	SD 262 F1	
	154	甕			Hue 7.5Y 7/1 灰白	緻密	堅		タクキ・表面剥 アラ接・芯内	SD 504 F1	
第27井	155	环	132	65	60	Hue 10YR 8/3 赤褐色	粗砂混	良	ヘラ切	ロクロ痕	SD 476 F1
	156	环	(120)	(56)	(50)	Hue 7.5YR 7/3 赤褐色	粗砂混	良	回転余切	ロクロ痕	SD 265 Y
	157	环	(132)	(54)	(45)	Hue 7.5YR 7/6 赤褐色	粗砂混	良	回転余切	ロクロ痕	SD 241 F1
	158	环	130	(54)	50	Hue 7.5YR 8/6 赤褐色	粗砂混	良	回転余切	ロクロ痕	SD 65 F2
	159	环	(160)	(74)	(70)	Hue 10YR 8/2 赤褐色	粗砂混	良	回転余切	ロクロ痕	SD 265 Y
	160	环	(132)	(60)	(45)	Hue 2.5YR 7/4 赤褐色	粗砂混	良	回転余切	ロクロ痕	SD 265 Y
	161	环	(128)	52	52	Hue 10YR 8/3 赤褐色	粗砂混	良	回転余切	ロクロ痕	SD 265 Y
	162	环	120	50	42	Hue 5Y R/3 赤	粗砂混	良	回転余切	ロクロ痕	SD 541 F1
	163	环	128	(52)	50	Hue 2.5YR 6/8 赤褐色	粗砂混	不良	回転余切	ロクロ痕	SD 265 Y
	164	环	(120)	(68)	56	Hue 10YR 8/3 赤褐色	粗砂混	良	回転余切	ロクロ痕	SD 477 F1
第28井	165	环	118	55	50	Hue 7.5YR 8/3 赤褐色	粗砂混	良	回転余切	ロクロ痕	SD 263 Y
	166	环	130	62	50	Hue 7.5YR 7/4 赤褐色	粗砂混	良	ヘラ切	ロクロ痕 回転余切と削除 引抜きと手彫り	SD 439 Y
	167	环			51	Hue 7.5YR 8/2 赤褐色	粗砂混	良	回転余切		SD 278 F2
	168	环	143	60	30	Hue 5YR 8/4 赤褐色	粗砂混	良	回転余切	ロクロ痕	SD 43 F1
	169	高台付环			71	Hue 10YR 8/3 赤褐色	粗砂混	良	回転余切	ロクロ痕・内側削除	SD 541 F1
	170	甕			136	Hue 2.5YR 8/2 赤	粗砂混	良		ロクロ痕	SD 265 F1
	171	甕				Hue 2.5YR 7/6 赤褐色	粗砂混	良		ロクロ痕・内外面削	SD 65 F1
	172	甕				Hue 7.5YR 8/6 赤褐色	粗砂混	良		タクキ・表面剥 アラ接・芯内	SP 43
	173	羽釜	(170)	(100)	(3)	Hue 2.5YR 6/3 にかい縁	粗砂混	良	回転余切	ロクロ痕	SD 265 F1
	174	甕	(100)	(66)		Hue 10YR 8/3 赤褐色	粗砂混	良		ロクロ痕	SD 503 F1
第29井	175	甕	(156)	(65)		Hue 2.5YR 7/8 赤褐色	粗砂混	良		ロクロ痕・内外面削	SD 65 F2
	176	甕	(90)			Hue 2.5YR 7/4 赤褐色	粗砂混	不良	回転余切	ロクロ痕	SD 441 F2
	177	羽釜	(130)			Hue 7.5YR 8/6 赤褐色	粗砂混	良		ロクロ痕	SD 91
	178	甕	84			Hue 5YR 8/4 赤褐色	粗砂混	良	回転余切	ロクロ痕・内面削	SD 439 Y
	179	壺	56			Hue 7.5YR 7/2 赤褐色	粗砂混	良	回転余切	ロクロ痕	SD 262 Y
	180	甕	96			Hue 7.5YR 8/6 赤褐色	粗砂混	良	回転余切	ロクロ痕・外側削	SD 440 F1
	181	甕	70			Hue 10YR 7/2 にかい縁	粗砂混	良	回転余切	ロクロ痕	SD 439 Y
	182	甕	(75)			Hue 5YR 8/3 赤褐色	粗砂混	良		ロクロ痕・ハケ目	SD 262 Y
	183	甕				Hue 10YR 8/3 赤褐色	粗砂混	良		ロクロ痕・アラ接・芯内	SD 279 F1
	184	甕				Hue 7.5YR 7/4 にかい縁	粗砂混	良		ロクロ痕	SD 490 F1
第30井	185	甕				Hue 7.5YR 7/3 にかい縁	粗砂混	良		ロクロ痕	SD 261 Y
	186	甕				Hue 10YR 8/3 赤褐色	粗砂混	良		ロクロ痕	SD 265 Y
	187	甕				Hue 10YR 6/2 赤褐色	粗砂混	不良		ロクロ痕・ハケ目	SD 265 F1
	188	土製品	ふるいの口			Hue 5Y 8/1 赤					SD 262 F1
	189	石製品	基石			Hue N 2					SD 168 F2
	190	土製品	土鍋			Hue 7.5YR 6/2 にかい縁					SD 88 F1
	191	石製品	砥石			Hue 10YR 7/4 にかい縁					SD 65 F1
	192	石製品	砥石			Hue 10YR 5/1 赤					SD 265 F1

切り後布ナデ整形され、高台部が付される。144・145は短頸壺である。口縁部が直立し、肩部が丸味をもちらながら張り、最幅部が器上半部にもつ器形と呈している。146は長頸壺である。頸部が欠損しているが形状から長頸壺と判断した。肩部が張り、器上半部より急激に屈曲し底部へ至る。器内面には水平にハケ調整された線が施こされている。148～154は壺の体部破片である。外面を格子目状叩きや条線状叩きとするもので、内面のアテは同心円アテ(148・152・154)、条線状アテ(151・153)がみられる。150は、口縁部分であり、削りのち布ナデされている。155～186は赤焼土器である。坏(155～167・169)は底部の切り離しがすべて回転糸切り離しで、内外面共に明瞭なロクロ痕を残している。160・162～166は複雑な整形となり歪った形状を呈している。167の底部には、「Ω」の墨書きが描かれている。168は台付の皿である。底部から直線状に口縁部へ至る。170～172・174～185は壺片である。器面にロクロ痕を残し、172は内外面共に条線状のアテ、叩き痕を残している。183は、体部に描かれた人面墨描土器片と思われ、髪を結んだ先端部を輪にした角髪の形をしている。173・177は羽釜である。173の図示では4単位につまみがあるように載せたが、両側2対のつまみが付されているものである。中心の図示は正面より見たつまみ部分である



第29図 包含層出土土器(1)



第30図 包含層出土土器(2)

ことをここで明示する。187は精塙土器片の口縁部である。胎土に粗砂を含み、ハケ状の擦き痕が見える。188はフイゴの羽口である。赤褐色を呈し表面はヘラ削り痕が施されており、灰褐色の焼成痕となる。192は砥石片である。全面に磨り痕がみられる。190・191は網の錘に使われた土錐である。

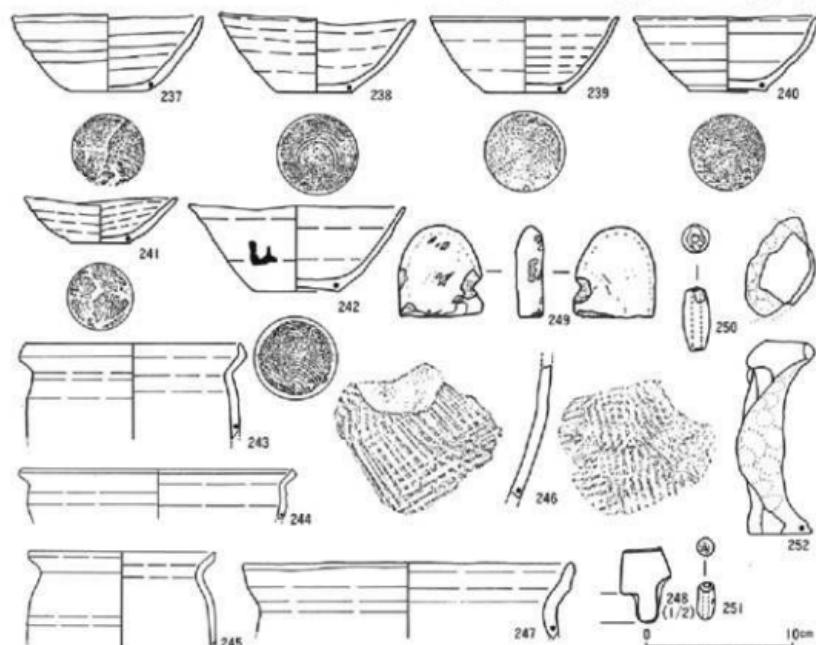
### 3 包含層出土遺物 (第29~31図、図版23・24)

本遺跡のほ場整備事業に係る調査面積は、調査区域として設定した6560m<sup>2</sup>の他、遺構・遺物の集中ヵ所を探るため設定した1×3mのトレンチ28ヵ所(84m<sup>2</sup>)を含めても、本遺跡面積405,000m<sup>2</sup>の1.6%を調査したにすぎない。各調査区域では、遺構面が確認される第IV層上面までに3つの包含層が色別され、各々より本遺跡の時期、性格、内容を明示出来る遺物が出土しており、触れるべき資料が多い。ここでは大部分は割愛せざるを得ないが、とくに注目すべき資料を図化した。図示した遺物の種類に土師器・須恵器・内黒土器・赤焼土器・灰釉陶器・青磁・軽石・支脚・土錐である。以下に記述する。

表9 包含層出土遺物観察表 (1)

件 組	遺物 番号	器 種	計測値 (mm)		色	調	胎 土	焼成	底部切端	調整技法・備考	出土地点 層位
			口径	底径							
第 1組	193	須 恵 器	蓋 (148)	(37)	Hue 5 Y 7/1 白	細 密	堅			ロクロ板	25-54-III
	194		蓋 (149)	(34)	Hue 10Y 6/1	細 密	良			ロクロ板 頭端へテリ	92-73-III
	195		蓋 (150)	(28)	Hue 5B 6/1 白	細 密	堅			ロクロ板	91-72-III
	196		蓋 30	25	Hue 5B 1.7/1 白	細 密	堅			ロクロ板 内凹面に壓延	94-71-III
	197		蓋 150	24	Hue N 5 白	細 密	堅			ロクロ板	25-59-III
	198		合子 (59)	(46)	Hue 10Y 7/1 白	粗砂混	良			ロクロ板	33-55-III
	199		环 127	50	46	細砂混	良	回転失切		ロクロ板 内凹面にハゲ目	92-77-III
第 2組	200	内 黒 土 器	环 135	50	55	細砂混	良	回転失切		ロクロ板 内面にハゲ目	91,92-68-III
	201		环 200	(300)	Hue 5.5Y 8/2 白	細砂混	良			ハゲ目	93-75-III
	202		环 160	(352)	Hue 5.5Y 8/2 白	細砂混	良			ハゲ目	95-79-III
	203		环 128	76	35	粗砂混	堅	ヘタ切	無調	ロクロ板 内凹面にハゲ目	97-59-III
第 3組	204	須 恵 器	环 (54)	(24)	Hue 5 Y 7/1 白	細 密	堅	回転失切		ロクロ板 裏面に黒漆付	86-76
	205		环 (46)	(21)	Hue 2.5YR 8/1 白	細 密	堅	回転失切		ロクロ板 内凹面に黒漆付	91-72-III
	206		环 113		Hue 2.5YR 2/3 白	細 密	良	ヘタ切		ハゲ目	83-59-III
	207		蓋 83	(94)	Hue 5B 2/1 白	細 密	良	ヘタ切		ロクロ板 背面に黒漆付	85-59-III
	208		蓋 54		Hue 2.5Y 3/1 白	細砂混	良	ヘタ切		ロクロ板 内凹面に黒漆付	80-54-III
	209		花文皿 (86)	(16)	Hue 2.5Y 8/3 白	細 密	堅	ヘタ切		ロクロ板 内凹面に文字(空窓)付	95-69-III
	210		环 (125)	(64)	Hue 5 Y 8/1 白	細 密	堅	回転失切		ロクロ板 裏面に黒漆付	91-72-III
第 4組	211	須 恵 器	环 (76)	(20)	Hue 5GY 6/1 白	細 密	堅	ヘタ切		ロクロ板 裏面に黒漆付	30-56-III
	212		环 (60)	(33)	Hue 2.5Y 8/2 白	細 密	堅	回転失切		ロクロ板 裏面に黒漆付	91-78-III
	213		环 115	80	34	Hue 5.5GY 7/1 白	細 密	良	ヘタ切	ロクロ板 裏面に黒漆付	X-0
	214		环 (131)	(76)	(32)	Hue 5BG 6/1 白	細砂混	堅	ヘタ切	ロクロ板 裏面に黒漆付	29-55-III
	215		高台付环	(56)	(12)	Hue 5B 5/1 白	細 密	堅	回転ヘタ切	ロクロ板 裏面に黒漆付	29-52-III
	216		环 (70)		Hue 5 Y 8/1 白	細砂混	良	ヘタ切		ロクロ板 裏面に黒漆付	30-52-III
	217		环 90		Hue 2.5Y 8/2 白	細 密	堅	回転ヘタ切		ロクロ板 裏面に黒漆付	33-52-III
	218		环 (130)	(38)	Hue 5 Y 8/1 白	細 密	堅	回転ヘタ切		ロクロ板 裏面に黒漆付	R P-10 91-77-III
	219		环 67	80	40	Hue 2.5Y 8/1 白	細 密	堅	ヘタ切	ロクロ板 裏面に黒漆付	X-0
	220		环 (132)	81	(40)	Hue 2.5YR 6/1 白	細 密	堅	回転ヘタ切	ロクロ板	92-79-III
	221		环 130	76	35	Hue 5 Y 8/1 白	細 密	良	ヘタ切	ロクロ板	93-75-III
	222		高台付环	(66)	(27)	Hue 5GY 5/1 白	細 密	堅	ヘタ切	ロクロ板 裏面に黒漆付	X-0

土器器（201・202）はA地区III層で検出された壺形土器である。201は口縁部が大きく外反し、胸部は垂直に立つ。器内外面に横位、縦位、斜位にハケ整形が施されている。202は口縁部が「くの字」状になり、頸部に二本のヘラによる線が施されている。体部外面にはハケによる条線が縦位に器面整形されている。時期は8世紀後半頃に推測される。須恵器は、蓋・壺・壺・壺・皿の器種がある。蓋（193～195・196・197）は、天井部をヘラ切り離し後、鉢部を付している。口縁部が急激に屈曲し垂下するもの（193・195・197）と、大きく反り上がるもの（194）、口唇端部がやや外反するもの（196）がある。また196は復元口径が3cm、器高が2.5cmを測るもので、長頸壺の蓋と考えられる。壺は遺構内出土の須恵器と同様にA類（210～221）、B類（222～226）があり、その法量や器形も同一なものが多い。227は皿形土器で底部から大きく外反し、口唇部で水平となる。第30図には底部に墨書きされた土器を提載した。墨書きされた文字は、判読されたもので「主・凡・レ・千・田家・加」があり、凡の文字が多い。222の底部にはヘラ書による「十」又は「×」がある。228～247は赤焼土器である。器種には壺・壺・壺がある。壺は法量の大きいものと、少ないものがあり、前者には229・240があてられ、器形も似たものである。後者は、器形を歪なものが多い。底部の切り離しは、すべて回転糸切りで、230には「中」、228には「丁」の墨



第31図 包含層出土遺物

書が、242には書体の不明な墨痕がある。248は、龍泉窯系の青磁碗の高台部片である。淡青色釉が施されている。209は、灰釉陶器である。宝相花文皿で、見込み部分にヘラ書きによる花文がある。愛知県猿投窯の黒笛90号窯に類例があり、それによれば、10世紀初頭の時期に位置される。243・245～247は赤焼土器甕である。246は内外面に条線状のタタキ、アテ痕が認められ、他は、器上半部のため不明であり、内外面にロクロ痕を明瞭に残す。244は同場である。計測による復元口径では46cmを測る。249は軽石による網の浮き、250・251は土錠である。網の組合せで確認された。252は支脚である。周辺が火を受けている。

表10 包含層出土遺物観察表 (2)

押 回	遺物 番号	器 種	計 測 値 (m/m)	色		胎 土	燒 成	底部切 断	調整技法	備 考	出 土 地 點 層 位
				口徑	底径						
第 223	須 志 器	高台付环	(70) (28)	Hue 2.5YR 6/1 オーラー灰	細砂混	堅	回転ヘラ切	サクロ瓶 裏面丸り、裏面凹凸有	25-25-III		
		高台付环	(66) (33)	Hue 10GY 6/1	粗砂混	良	回転ヘラ切	サクロ瓶 裏面丸り、裏面凹凸有	26-51-III		
		高台付环	(56) (12)	Hue 5PB 7/1 胡蝶成	致密	堅	回転ヘラ切	サクロ瓶 裏面丸り、裏面凹凸有	29-52-III		
		高台付环	(100) 62 (59)	Hue 10GY 5/1 致密	致密	堅	回転ヘラ切	ロクロ瓶	91-77-III		
30 西	赤焼土器	环	(140) 52 (31)	Hue 7.5YR 8/3 燒成	粗砂混	良	回転条切	ロクロ瓶	91-77-III		
		环	(51) (16)	Hue 10YR 8/3 燒成	粗砂混	良	回転条切	ロクロ瓶 裏面丸り、裏面凹凸有	R P 79		
		环	(150) 62 (64)	Hue 5.5YR 8/3 燒成	粗砂混	良	回転条切	ロクロ瓶	87-59-III		
		环	118 58 52	Hue 5 YR 8/4 燒成	粗砂混	良	回転条切	サクロ瓶、外側に内側に火傷 り上部、裏面丸り、裏面凹凸有	95-70-III		
		环	(122) 46 (47)	Hue 7.5YR 7/6 燒成	粗砂混	良	回転条切	ロクロ瓶	86-76-IV		
		环	(120) 58 (54)	Hue 7.5YR 8/6 燒成	粗砂混	良	回転条切	ロクロ瓶	R P 32		
		环	(130) (30) (43)	Hue 5 YR 7/6	粗砂混	良	回転条切	ロクロ瓶	85-59-III		
		环	120 60 43	Hue 7.5YR 7/6	粗砂混	良	回転条切	ロクロ瓶	83-59-III		
		环	122 54 45	Hue 5 YR 8/2 白	粗砂混	良	回転条切	ロクロ瓶	86-77-IV		
		环	130 42 50	Hue 5 YR 8/4	粗砂混	良	回転条切	ロクロ瓶	94-68-IV		
31 西	赤焼土器	环	128 50 (52)	Hue 2.5YR 7/8 燒成	粗砂混	良	回転条切	ロクロ瓶	95-70-III		
		环	132 51 50	Hue 5 YR 7/6	粗砂混	良	回転条切	ロクロ瓶	94-74-III		
		环	(120) (53) (51)	Hue 7.5YR 8/3 燒成	粗砂混	良	回転条切	ロクロ瓶	27-54-III		
		环	(125) 52 50	Hue 5 YR 8/3 燒成	粗砂混	良	回転条切	ロクロ瓶	92-70-III		
		环	113 44	Hue 10YR 8/2 燒成	粗砂混	良	回転条切	ロクロ瓶	95-77-III		
		环	(145) (58) (58)	Hue 5 YR 7/6	粗砂混	良	回転条切	サクロ瓶、外側に内側に火傷 り上部、裏面丸り、裏面凹凸有	92-70-III		
		环	(65) (41) (41)	Hue 5 YR 7/5 燒成	粗砂混	良	回転条切	ロクロ瓶 内側面に焼	93-79-III		
		环	(46) (67)	Hue 7.5YR 8/4 燒成	粗砂混	良	回転条切	ロクロ瓶 内側面に焼	95-71-III		
		环	(220)	Hue 5.5YR 8/4 燒成	粗砂混	良	回転条切	ロクロ瓶 内側面にハク目	95-75-III		
		环	(94)	Hue 10YR 8/2 燒成	粗砂混	良	回転条切	サクロ、サテ繩 外側に焼	92-60-III		
32 西	赤焼土器	环	(222) (50)	Hue 7.5YR 7/6 燒成	粗砂混	良	回転条切	ロクロ瓶 内側面に焼	95-73-III		
		青 瓶	碗	Hue 10Y 6/2 オーラー灰	致密	堅			94-79-III		
		石 製 品	う き	Hue 3.5Y 8/1					26-52-III		
		土 製 品	土 錠	Hue 2.5YR 7/6 燒成					86-74-IV		
		土 製 品	支 脚	Hue 7.5YR 8/3 燒成				指輪瓶	R P 84		
		土 製 品	土 錠	Hue 10Y 5/1					95-88-III		

## V ま と め

今回の調査は、昭和63年度県営ほ場整備事業(月光川左岸地区)に係る小深田遺跡の調査成果をまとめたものである。調査は、調査時期(4月～9月)の関係から前・後半と分け、前半には、転作地を早く終了させるため、一部早刈りを行ない前年度の分布調査で確認されていた遺構・遺物の集中区である遺跡東部を中心に進めた。分布結果によりグリッドは集中区域を中心に設定し、A区を遺跡中央東側(84～94—68～80グリッド3,075m<sup>2</sup>)とB区(23～36—51～57グリッド1,885m<sup>2</sup>)計画排水路区(13～38—60、65～99—60グリッド1,600m<sup>2</sup>)の計6,560m<sup>2</sup>を調査した。

### 1 遺構について

A区では溝跡・土壌・建物跡に組合わされなかった柱穴の他、旧河川と考えられる幅12.5m、深さ60cmの溝が確認され、同時に調査を進めていた灌漑排水路調査区へ続く様相を呈していた。また土壌内には共膳のセットとしてとらえられる壺が一括し出土している。溝状遺構内には赤焼土器壺が置かれた状態で出土し、小深田遺跡での生活用具が捉える。A区での包含層中では、平安時代以前と考えられる土師器の出土もみられ、飛鳥時代から奈良時代にかけての集落の存在を捉うことが出来るが今回の調査では明確な遺構の確認が出来なかった。

B区では、東西52m、南北32m以上に続く板材列との内部に建物跡・土壌・溝状遺構等が検出された。建物跡は2間×3間、2間×4間の東西棟二棟が確認され、板材列の方向とその軸を同一となる建物跡である。柱穴内からの出土土器はみられなかったが、建物跡が検出された第III層上面からは、平安時代8世紀を中心とした土器片が出土しており、建物跡の時期も同一と考えられる。しかし1500m<sup>2</sup>と考えられる板材列内での建物跡の在り方が、平安時代集落跡の中で、建てられている棟数が少ない。酒田市東部に存在する城輪柵跡を中心とした平安時代集落跡では、母屋一棟に付属建物1・2棟、井戸跡1基土壙等が一単位として5～7単位が集落を構成していたものと考えられている(註1)。本遺跡で確認されている建物跡はこれら一単位とする集落構成の建物跡としては認めることが出来ない。板材列で囲まれた範囲が一集落として想定するなら、更に建物跡が存在するものと考えられる。しかし調査では、確認された板材列の西半部が遺構の集中区域となり、東半部は、東西になる数条の溝状遺構が確認され、建物跡として組合わすことが出来る柱穴は認められなかった。また板材列の断面観察によって一列又は部分によって2～3列となる板材は、やや等間隔に板列と直交する板材が仕切り状に設置され、板列の補強として存在したもの

と考えられる。このことからこれら板材列は、長期にわたり設置されたものと考えられ、内部の遺構とは密接な存在があるが、確認された建物跡が弱いことについては今後の検討が必要である。庄内地方では板材列を伴う集落跡が確認された例は、沼田遺跡(註2)、生石2遺跡(註3)、南興野遺跡(註4)があり、本遺跡は4例目となる。特に生石2遺跡では100m以上も続く板材列の内部に建物跡の他、倉庫跡と考えられる縦柱建物跡等が多数確認されており、他の遺跡とは性格が異なる遺跡としてとらえることが出来る。板材列を伴う集落跡の性格については、生石2遺跡を除いて、本遺跡を含む板材列を伴う遺跡は、板材列の存在が、地理的環境によるものか、又気象条件(西からの強風又は西風による飛砂)を防ぐ施設として集落を囲むものなのかについては、今後の類例と検討が課題として上げられる。現在の集落では、家の周辺に樹木を植えているが、古代でも同様な要因がうかがえる。

## 2 出土遺物について

本遺跡からの出土遺物は大別して土師器・内黒土器・須恵器・赤焼土器・陶磁器・土製器・石製品等がある。土器は赤焼土器が出土遺物中最も多い。第IV章を器形や法量により簡単な分類を試みたが、時期は8世紀から10世紀まで測るものがある。土師器は奈良時代の變形土器が主体となり、それに伴う須恵器の短頭壺や肩壺等の古い様相を呈する土器が出土している。溝状遺構内からの出土が多く、廃棄された感を受けるが、明確に他の遺構に結びつかず、特に板材列掘り方から出土した遺物は平安時代9世紀が当たられる。時期的な移行としては、B地区のSD265、262、263が8世紀代を、A地区のSD91、SK149が9世紀代が想定され、その出土土器により推測される。赤焼土器では9世紀代を中心とした壺や甕が出土し、A区の遺構内出土土器や、B区の他の遺構内出土土器があてられる。その他では、A区のSK156土壤からは、網に使用された土錐や、須恵器の注口を考えられる注口部分が出土している。また、計画排水区域からは、円面鏡と考えられる陶鏡が、A区の包含層からは、愛知県猿投窯と考えられる黒窓90号窯(註5)と同類の灰釉陶器花文皿が出土しており、貴重な古代資料としてあげられる。

以上のことから本遺跡は、8世紀後半から10世紀代にかけての集落跡として推測され、本県の北部における古代集落跡の一例として提示される。

註1 佐藤庄一・野尻侃・安部実「北田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第53集 1982

註2 野尻侃他「沼田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第78集 1984

註3 安部実「生石遺跡発掘調査報告書(3)」山形県埋蔵文化財調査報告書第117集 1987

註4 野尻侃他「南興野遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第114集 1987

註5 愛知県教育委員会「愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告(1)」

註6 「愛知県古窯跡群分布調査報告(III)」付猿投窯の編年について

# 図 版



遺跡遠景(南西から)



遺跡近景(東から)



トレンチ調査風景



A 地区設定



A 地区表土除去



B 地区表土除去



層序(B地区西壁)



A地区遺構検出状況(北から)



東側排水路調査区全景(西から)



西側排水路調査区全景(東から)

日地区遺跡検出状況(東から)



図版 6



SB 1 建物跡



SB 2 建物跡



S A 3 板材列北辺(東から)



S A 3 板材列北辺(西から)



西辺南北列



北辺東西列



北辺中央部分



北西角



西辺列土層断面



しりき板部土層断面

S A 3 板材列



S K156 土壌窓堀



S K498 土壌土層断面



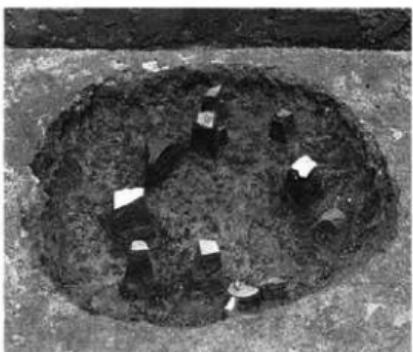
S K149土壤完堀



S K203土壤完堀



S K33土壤完堀



S K244土壤完堀



S D91溝状造構



S D65溝状造構



S D 262溝状造構造物出土状況



S D 152溝状造構完堀



S D 265溝状造構検出状況



S K 156 覆土上部遺物出土状況



土師器一括土器



S D 91 土器出土状況



R P 34 赤燒壺



R P 43 赤燒壺

土器出土状況



R P32赤燒壺



R P35・36・37赤燒壺



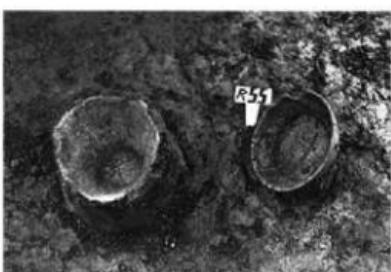
R P39須惠器大壺



R P51須惠器蓋



R P52須惠器高台付壺



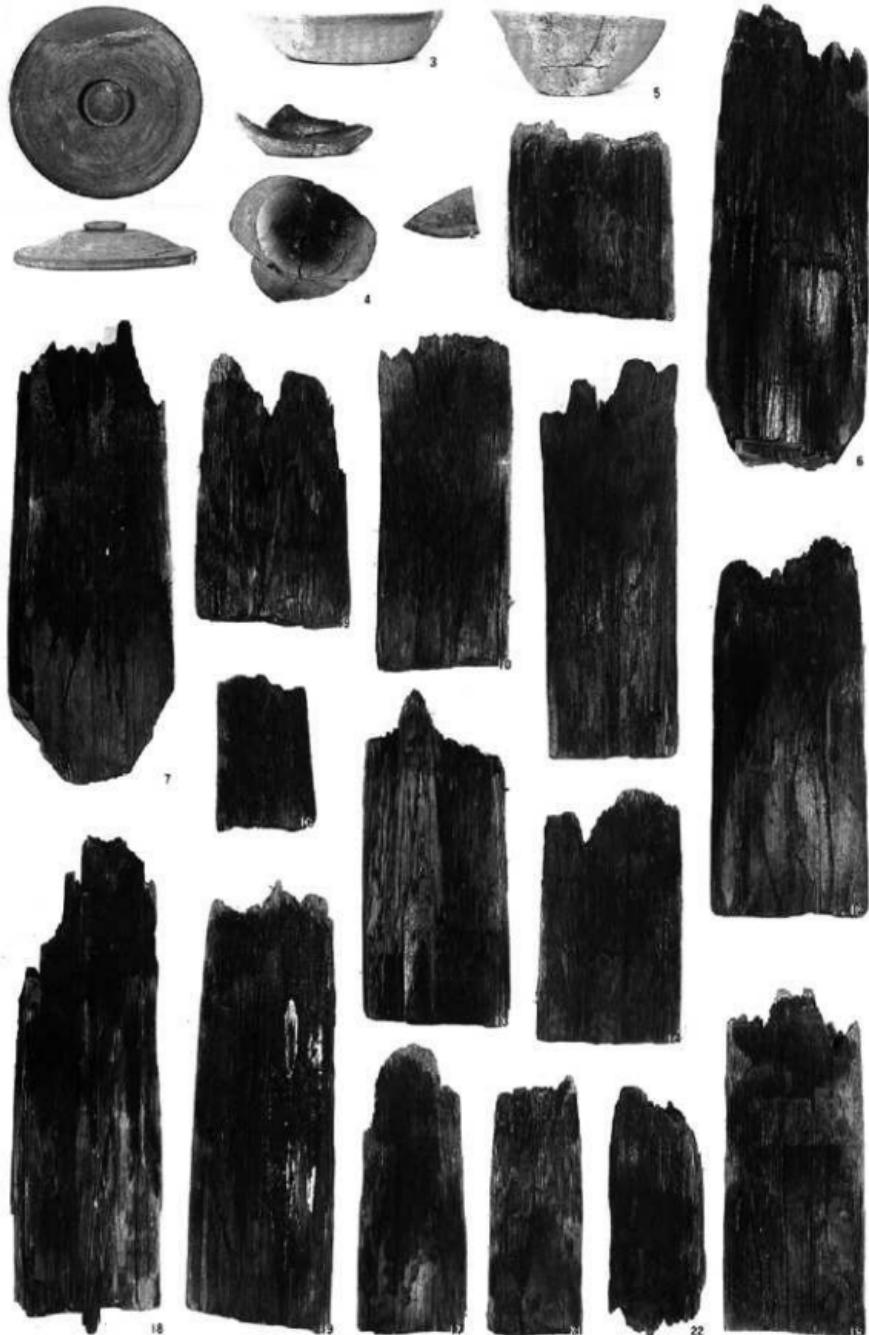
R P55須惠器壺



S D262內須惠器大壺



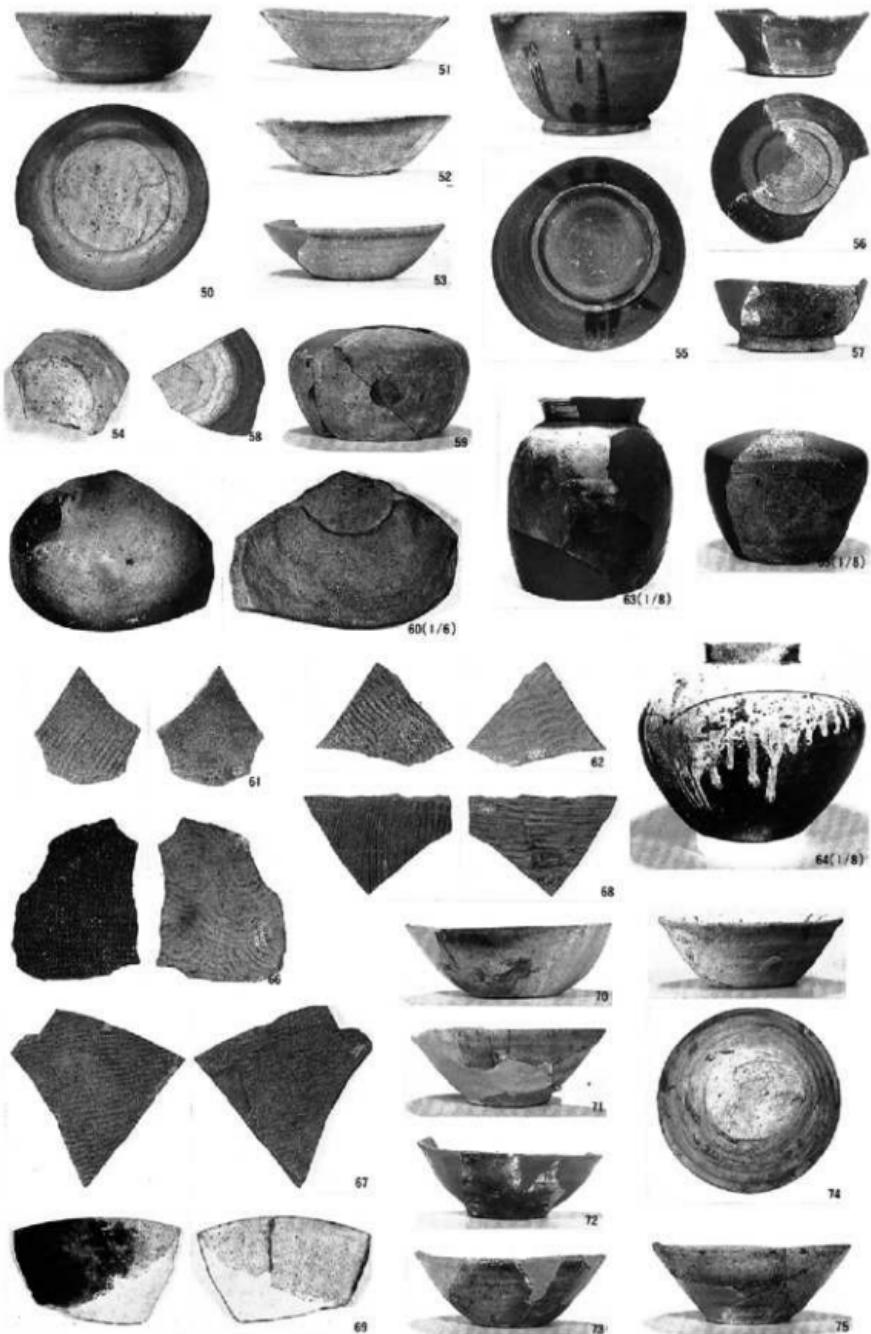
S D265土器出土狀況



柱穴跡、板材列出土土器・しきり板（土器1/2、木製品1/8）



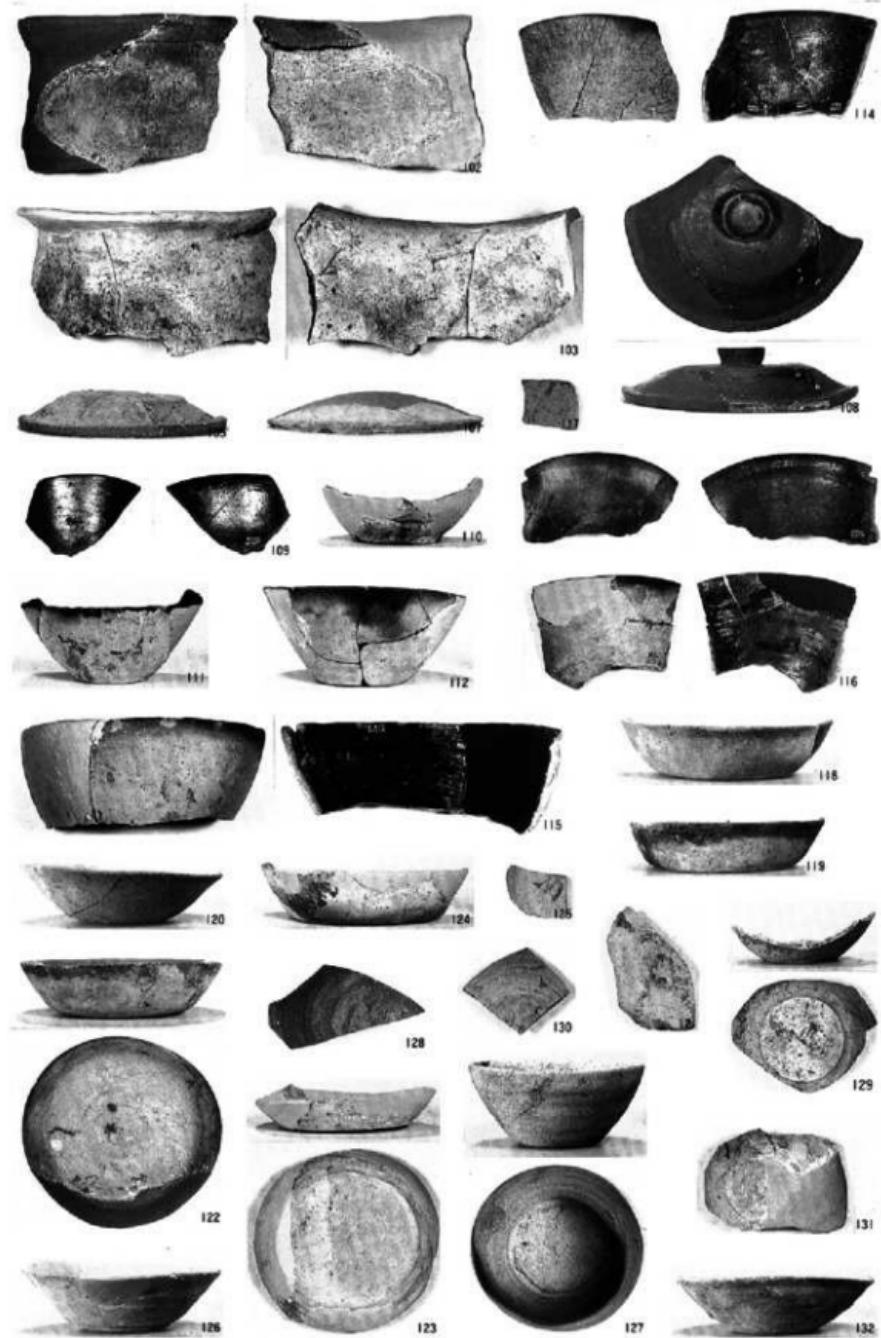
板材列しきり板、土壤出土土器



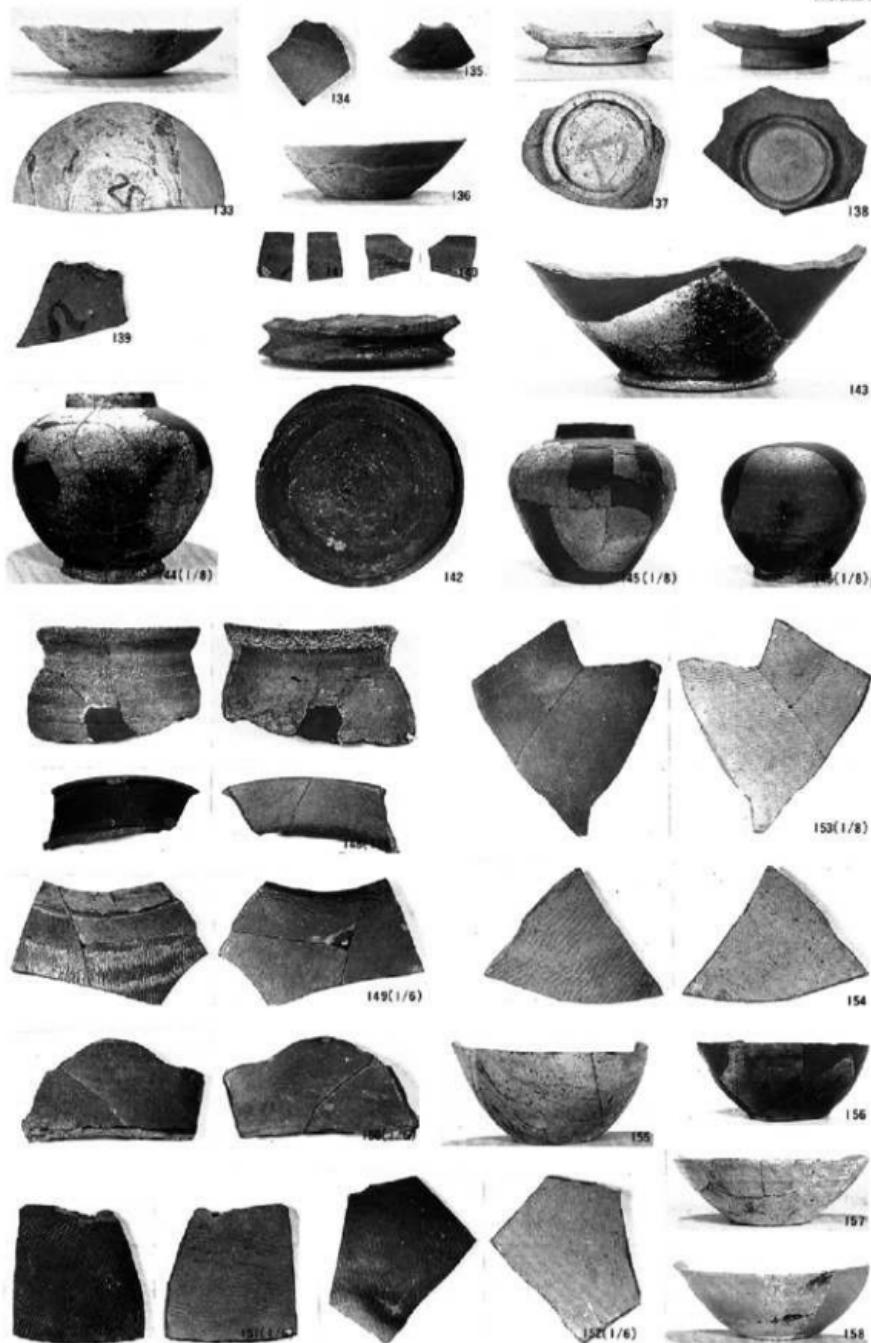
土壤出土土器



土壤・構状造構出土遺物



溝状造構出土土器(1)



满状造構出土土器(2)



溝状造構・包含層出土遺物



包含層出土遺物(1)



包含层出土遗物(2)

---

山形県埋蔵文化財調査報告書第140集

こ　か　だ　遺　跡

発掘調査報告書

平成元年 3月25日 印刷

平成元年 3月31日 発行

発行 山形県教育委員会  
印刷 瑞田宮印刷所

---